麻原彰晃の世界 PART10

麻原彰晃

❖仏教真理

五蘊無我

ごうんむが

あなたを絶対幸福へ導く仏教の神髄

麻原彰晃尊師説法

巻末質疑応答

❖

麻原彰晃の世界 PART10

あなたを絶対幸福へ導く
仏教の神髄

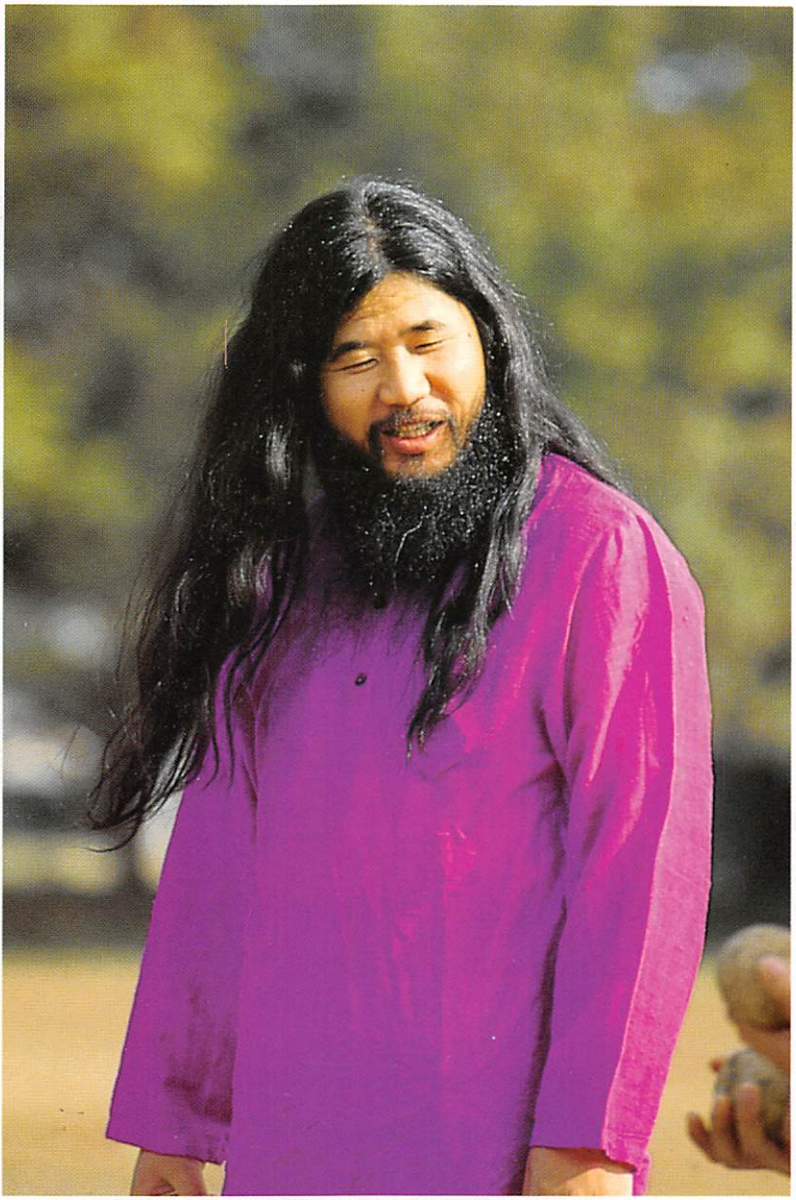
❖仏教真理

五蘊無我

（ごうんむが）❖

麻原彰晃尊師説法
巻末 質疑応答

麻原彰晃



はじめに

仏教に「五蘊」という言葉がある。漢訳でいうなら、色・受・想・行・識、オウム真理教のわかりやすい現代語に直すなら、五つの集積＝形状・容姿・感覚・表象・経験の構成・識別（の集積）となる。そして、迷妄なるわたしたちは、これらを我と考え、とらわれるがゆえに苦しむのである。

しかし、これらはわたしたち本来のものではなく、その事実は、例えば死を境に離れなければならない肉体を〝わたし〟と考える矛盾一つをとっても容易に理解できる。

魂の存在、死後の世界の存在を自らの修行体験によって確認している修行者にとってはなおさらのことで、まさにわたしたちの苦しみは、わたしたちの本質ではないものを我と錯覚するがゆえに生じ

るものであるというのが、この本で麻原彰晃尊師が説かれている「五蘊無我」の教えの意味である。

宗教は本来、わたしたちを迷妄に引きずり込む煩悩を落としていくことで、絶対的な自由・幸福・歓喜を得るものである。にもかかわらず、現代のほとんどの宗教は、悲しいかなこの煩悩を増大させ、目先だけの願望成就等に走っているのが実情である。

本書によって皆さんが、すべてをありのままに見つめる視点を身につけ、人間がつくり上げた観念的なものを越えて不変の〝真理〟にお気づきになれば幸いである。

なお、本書の構成は、「五蘊無我」に関する説法を日付順に並べさせていただいた。これは、仏典研究によって一般的な仏教用語を、麻原尊師の叡智によって導き出された、現代人にわかりやすい平易な言葉に徐々に置き換えているので、著しい混乱を避けるためである。

ちなみに、これらは『南伝大蔵経』の原文であるパーリ語を一語一語吟味した結果のものであり、その比較検討に際しては巻末の言語対比表をご参照いただきたい。

何より、まずはこの書を最後まで熟読されて、物質的には豊かになった現代社会の中で自分がどう生きるべきか、考えてみていただきたい。

最後に、本書を手にされた方々が、精神の本当の充足を得られることを願ってやまない。

一九九〇年十二月

オウム真理教広報編集部

麻原彰晃の世界 ❖ PART 10

仏教真理 五蘊無我

——目次——

はじめに ——— 1

◆第一話 五蘊からの出離 ——— 10
「愛喜と苦悩を超えて」

◆第二話 ヨーガ理論と仏教理論の同一性 ——— 19
「五蘊とプラーナ」

◆第三話　欲六界を超越し、ブラフマンの世界へ
「五蘊を滅する修行法」　34

◆第四話　類い稀なチャンスを生かせ！
「マハー・ニルヴァーナへ到達する四つの条件」　48

◆第五話　今生で人間を超えよ！
「不死に至る四つの実践」　53

◆第六話　菩薩の修行
「苦しみを乗り越える四つの土台」　63

◆第七話　より良い転生のために
「全力で真理の実践を」　76

◆第八話　苦しみからの脱却
「大いなる徳を持て」　89
◆第九話　五蘊を神々へ
「マハー・ニルヴァーナへ至る道」　102
◆第十話　光に満ちた未来を
「四預流支の実践」　117
◆第十一話　意識の変化と強い意志を
「広大な真理の光のために」　124
◆第十二話　真理勝者の道を歩め！
「絶対的な平安の境地へ」　140

◆第十三話　苦しみの本質を探る
「五つの集積と四つの記憶修習述」　154

◆第十四話　まず、五蘊を証智せよ
「四つの修行により、完全煩悩破壊界へ」　162

◆第十五話　一つ一つを確実にクリアせよ
「十三段階の道と十のきずな」　174

質疑応答　198

言語対比表　206

仏教真理　五蘊無我

◆第一話　五蘊からの出離

「愛喜と苦悩を超えて」

◉喜びの裏側には

今日は、五蘊（ごうん）における愛着を離れる意味合い、つまり解脱していく、辟支仏（びゃくしぶつ）として解脱していく意味合いについて話したいと思う。

では、まず愛喜という問題から。愛喜とは何かというと、愛を喜ぶと。いったい、何の愛を喜ぶのかと、ね。それは、わたしたちがこの肉体を持つこと、これを喜ぶんだと、ね。そして、わたしたちが、若々しくあること、これを喜ぶんだと、ね。そして、わたしたちの筋肉が隆々であること、これを喜ぶんだと、ね。そして、わたしたちのスタイルがいいこと、美しいこと、これを喜ぶんだと、ね。

ではだ、いったい愛喜の裏側には何が存在しているだろうか。当然、苦悩が存在している。例えば、わたしたちが若々しいことを喜ぶとするならば、その終わりである老い、あるいは死だ、これに対してわたしたちは苦悩しなければならない。

もし、ここに無智の人がいるとするならば、完全なる無智な人がいるとするならば、老死を知らず、ね、そして今の若さだけを見つめ、ただ喜んでいると。そして、もしわたしたちが筋肉隆々であること、ね、筋骨たくましいこと、これを喜ぶならば、年を取り、ね、筋肉衰え、ね、皺が出て、そして死んでいかなければならないと。そのときの衰えというものは、大変な苦悩である。

もし、わたしたちが美しいこと、あるいはスタイルがいいことを喜ぶならば、例えば今のわたしみたいに、ねえ、八〇キロ近い体重になると、これは悲しみの材料となると。あるいは年を取り、皺が出てきてね、美しさが変貌すると、悲しまなければならない。これが、色の愛喜と色に対する苦悩であると。

◉感覚が生む喜びと苦しみ

では、感覚はどうだろうかと。感覚の喜びとは何だろうかと、ね。例えば、美しいものを見たときの喜びと、ね。例えば、甘い香りをかいだときの喜びと。例えば、美しい声を聞いたときの喜びと、ね。例えば、おいしいものを食べたときの喜びと。例えば、心地よい感覚を味わったときの楽しみと、ね。例えば、心地よい言葉を聞いたときの楽しみと。これが、受に対する愛喜であると。

では、受に対する苦悩とは何だと、ね。それは、醜いものを見たときの苦悩であると、ね。あるいは、聞きたくないような音、音楽、声を聞いたときの苦悩であると、ね。あるいは、例えばトイレのにおいみたいな、ね、かぎたくないにおいをかいだときの苦悩であると。そして、味わいたくないものを味わったときの苦悩であると、ね。

そして、肉体に苦痛を受ける、あるいは、例えばやけどをするときの熱感だとか、あるいは冷たさね、極度の冷たさ、こういうものを味わうときの苦悩であると。あるいは、心にね、心を苦しめるような言葉、ね、あるいは考えを聞いたと

きの苦悩であると。

これが感覚の愛喜、受の愛喜と受の苦悩である。

◉表象の渦の恐ろしさ

では、わたしたちの表象の、ね、表層意識における愛喜とは何だろうかと。これは、わたしたちがある程度徳を積み、ね、そこで経験するイメージというものがなかなか楽しいと。そのイメージに入っているときに楽しみを味わうと。その表層に巻き込まれたときの楽しみと。これが表象の愛喜である。

そして、表象のいったい苦悩とは何だと。これは、わたしたちが、例えば不安という条件があって、そこから登場するいろいろな表層想念の渦に巻き込まれたときの苦悩である。例えば、あしただれかに叱られるんじゃないかとか、ね。例えば、何となく人に痛めつけられるような感覚があるとかね。例えば、何となく病気しそうな感じとか。例えば、何となく、両親に何か起きるんじゃないかというような感覚とかね。これは、徳がなくなったときに生じる表層の苦悩である。

◉意志の愛喜と苦悩

では、ね、行（ぎょう）、つまり、意志の愛喜と意志の苦悩は何だろうかと。意志の愛喜とは、まず自分が決めたことが達成できたときの喜びであると、ね。例えば、大学へ合格すると。例えば、好きな人を手中にすると、ね。例えば、お金を得たいと思って得ると。例えば、買いたいものが手に入ると、ね。これが、行の愛喜である、ね。行というのは意志だね、意志の愛喜であると。

では、意志の苦悩とは何だろうかと。例えば、ね、自分がなしたくないことをなさなければならないと。例えば、自分の決めたことができないと。自分の決めたことができないのはそれはそれでいいと。

しかし、例えばここに盗賊があって、その盗賊は逃げ延びようと一生懸命努力していたと、ね。捕まったら、拷問を受けて死刑であると。そして、ある段階まで盗賊は逃げ延びることができたと。盗賊はそこで喜んだと。俺はこれで逃げ延びられるぞと。そして国境近くまできたと、ね。

ところが、そこにいた警官に捕まって、そして拷問を受け、ね、自分が死にた

くないような、例えばギロチンにかかるだとか、例えば絞首刑にかかるだとか、例えば電気椅子にかかるときの苦悩は、いったいどのようなものだろうかと。

もちろん、感覚的な苦悩はあるだろう。しかし、心において、ね、その自分が生きたいと願う、ね、もっともっと生命を長引かせたいと願う意志が切断されたとき、ね、遮断されたとき、いったいどのような思いが生じるだろうかと。これが、行の苦悩である。

◉識のデータと理解

そして、識の愛喜とは何かと、ね。これは、修行者にしかなかなかわからないんだけども、要するに潜在意識のデータ、このデータが大変な功徳があって、ね、それが素晴らしい、ね、データとなって蓄積されていると、ね。そして、わたしたちは潜在意識に動かされているわけだから、この現象の生活そのものも、ね、大変幸福であると。これが、識における愛喜であると。

では、識における苦悩とは何だろうかと、ね。それは、わたしたちが悪業を積

み、その悪業によって、わたしたちの識のデータが、ね、正しくないデータが入ると。そうすると、例えばこの現象の生活においてもね、なかなか思うように生きることができないと。もちろん、君たちが瞑想を深めていけば、その識、その識がいったいどういうデータを持っているのかということに気づくだろう、ね。それで、その識を知るならば、自分の、ね、もともと持っている識自体がどれほど濁っているデータなのか理解できるはずである。

この、識の説明はなかなか難しい。しかし、例えばケイマ大師（現在はマハー・ケイマ正大師）だとかマハーカッチャーヤナ大師だとかの瞑想体験を聞いていると、自分の識がどれほど、例えば、綺麗な部分と濁っている部分があるかという話をよくする。これは、三昧に入ってのみね、わかることなんだね。その識の愛喜、そして苦悩、これを理解すると。

◉邪悪なデータの消滅

ではだ、色、受、想、行、識、今の言葉でいうならば、この肉体、それから感

覚、それから表層意識、それから意志、それから、ね、意識といった、この五つのね、蘊、つまり集まりだ、この集まりの愛喜と苦悩を知っていったいどうなるんだと。

この愛喜と苦悩を知るということは、これから出離するための条件なんだと。出離とは何かと。この五蘊からいで離れることなんだと。では、いで離れるとはどういうことだと。それは、例えば四つの善行（四正断）を行なう。例えば、ね、瞑想をする。こういうことによって、自分のまず五蘊を知り、その愛喜とそれから苦悩を知り、ね、そしてそれに対して綜制を加え、つまり精神の集中を加え、外していくと。これが出離であると。

ではいったい、一つのデータを外すのにどれぐらいの時間がかかるんだと。だいたい、二時間かかると。二時間以上一つのデータに対して集中しきるならば、当然そのデータを消すことができると。そして、集中するために必要なこと、それが先程言った悪業を滅し、善業を増大させることなんだと、ね。

ということは、今あなた方が行なっているワーク（出家修行者の奉仕行）、こ

れはいったいどういう意味があるんだと考えたら、まず功徳を増大させていると。そして、それに集中する訓練をなしている人は、瞑想修行に入ったとき、楽々二時間、三時間、四時間とね、瞑想修行ができると、ね。そして、シッシャ（出家修行者）であるからには、当然戒律というものがあるから、悪業をなさなくてすむと。よって、君たちは出離ができるというわけだ。

そしてね、釈迦牟尼（しゃかむに）の教団ではこういう罰があったんだよ。これは、だいたいオウムでいうならば、大師格（現在の師）の者がね、新しいシッシャを教育するわけだけども、そのシッシャの、ね、あまりにも質が悪く、いつも戒を破っていると、その善行を増大させるための瞑想法、あるいは生活規範をね、逆に崩してしまうと。善行の手伝いをしないといった戒があったわけだね。

だから、いかに四つの断が重要であるか、そして、君たちが小乗の解脱をする際ね、この愛喜、苦悩、出離といった三つのプロセスが必要であるか。それをよく理解してほしい。はい、それでは今日の講話はこれで終わります。

一九八九年五月三日　富士山総本部にて

◆第二話　ヨーガ理論と仏教理論の同一性

「五蘊とプラーナ」

◉五蘊を動かしているもの

今日はね、少し高度な話をしたいと思います。

まず、わたしたちを構成している五つの要素、ね、これは何だかわかるかな。色、受、想、行、識という五つの要素があると、ね。色とは、わたしたちの肉体であると。受とは、わたしたちの感覚であると。想というのは、わたしたちの表層の意識であると。行というのは、わたしたちの意志であると。識というのは、わたしたちの意識であると、潜在の意識であるといわれていると。

ところでだ、いいかな、色、受、想、行、識、これは、いったいわたしたちで

あろうか、という質問に対して君たちはどう答えるか。では、色、受、想、行、識は、わたしたちの本来のものではないと言い切れるか。

実はね、今日の話というのは、この五蘊とそれからプラーナ、この関係の話をね、君たちにしたいと考えているわけだけど、この五蘊を動かしているもの、これがプラーナなんだよ。そしてね、正しい言い方をするならば、五蘊イコールわたしたちのものでないと、わたしたち本来のものではないと、ね、断定することもできるんだけども、それがまだ断定できないと。ずいぶん、曖昧な言い方だね、これは。

それは何であろうかといったならば、例えばここに一本のバラの花があるとしようと。そうすると、そのバラの花から発するにおい、ね、そしてバラの花、この二つというものは、切り離せるものであるかどうかだ。

現代では、ね、そのにおいの源が何であるかわかっているから、当然切り離すことができると。しかし、今から二千五百年前の仏陀釈迦牟尼の時代はどうだったと思うか。切り離せなかったよね。人工的に、においも作ることが当然できな

かったし。

◉プラーナをコントロールできれば

でだ、このにおいとそれからバラの花、この関係とね、プラーナとそれから五蘊との関係、ね、これが同じであると、ね。

いったい、何をわたしがいいたいのかと。ここに真我と三グナがあると、ね。まあ、三グナによってプラーナは構成されているわけだから、当然三グナがあると、ね。そして、五蘊があると、ね。

例えば、肉体は見ることができると。これはＯＫだな。どうだ。しかし、例えばね、だれかが死んだとして、その魂が抜け出してだよ、そのあと、肉体をわたしたちは見ることができるかといったら、どうだ、当然できるよね。そうでしょう。よって、肉体はわたしたちのものではないといえると、ね。

しかし、もしだよ、それにだれかがプラーナを使ってね、その死んだ肉体を動かそうとするならば、肉体は動くわけだよね。よって、もし完全にプラーナをコ

ントロールできる人間がいるとするならば、肉体は我がものであるといえないかな。どうだ。ということは、肉体は我がものでないともいえるし、我がものであるともいえると。

つまりどういうことかというと、肉体を動かしているプラーナをね、わたしたちがコントロールできるかどうかで決まるんだということ。そして、そのプラーナこそ、わたしたちの心——あるいは、真我といった方がいいかもしれないね——にダイレクトに影響を与えるものであると。

では、いったいなぜそういえるんだといったら、シャクティーパットがあるよね。これはミラレパ大師（現在は正悟師）の話だけども、ケイマ大師（現在は正大師）がシャクティーパットをなさるときに、そばで、ね、ミラレパ大師がそれを見ていたと。すると、ケイマ大師の顔が、どんどんおばあさんになっていくと。老化していくと。

これはどういうことだ。つまり、相手のプラーナがケイマ大師の肉体に影響を与えるわけだよね。わかるかな、言ってることは。そうすると、そのプラーナの

純度が低ければ低いほど、彼女は老化した状態になるよね。どうだ。そして、例えば相手の状態というのはどんどん良くなっていくと。

そして、ね、今日わたしが話したかったもう一つのポイント。なぜ、クンダリニー・ヨーガではなくて、マハー・ムドラーを成就した後シャクティーパットをやらせているかというと、心の成熟、あるいは真我の成熟度みたいなものがあって、それとプラーナとの関係、ね、これを考えるとだ、心が、あるいは真我がね、成熟していればいるほど、そのプラーナの本質というものを、直感的に、どうだ、理解していると思うか、していないと思うか。

理解しているということは、それに対して感応しやすいと思うか、しづらいと思うか。しにくいね。あるいは、いったん感応したとしても、それからまた解放されて元の状態に戻りやすいと思うか、戻りづらいと思うか、ね。

◉微細な解析ができればできるほど……

もしだ、ここにね、二つの食べ物があると。においは全く同じであると、ね。

味覚はわからないと、ね。味覚がわからないとはどういうことかというと、ね、ムーラダーラ・チャクラしかね、本当の意味で使われていない生き物があったとして、ね、においはわかるんだけど味は全くわからないと。

で、その二つの、いいかな、においというものは、同じであるとしようね。これを食べたとして、その食べた主体、これは同じ物を食べたと思うか、違う物を食べたと感じると思うか、どうだ。同じ物を食べたと感じる、そのとおりだね。

ではもう一つだ。じゃあ次は、ね、味覚がはっきりとあって、その味覚が識別できる力を持っていると。そして、この二つの食べ物が違ったとするならば、どうだ、この二つは同じであると見ると思うか、違うものであると見ると思うか。これが、成熟をしている魂と成熟をしていない魂の違いなんだよ。わかるかな、言ってることは。

つまり、微細な解析ができればできるほど、どうなる。客体というものに対して、より正確に見ることができると。で、それをね、心の成熟だといっているんだ。そして、このプラーナをより微細に観察できればだよ、これはわたしのプラー

ナではないと、これはわたしのプラーナであるということが理解できるわけだ。ところが、もし真我が鈍感だと、どうなると思うか。どうだ。先程の味覚のない主体と同じように、その差がわからなくなると。

◉徳の高さとプラーナ

では、いったい何をわたしはいっているんだと。はい、もう一つ本題に戻ろう。いいかな、もう一回本題に戻るよ。色、受、想、行、識は、我が本体ではないと。これはOKだね。しかし、それにプラーナがミックスされたときに、我というものが存在するわけだね。いいですか。そして、この我というものをまず分離し、ね、分離というのは何かというと、その五蘊とプラーナを分離しだよ、そしてそのプラーナの本質を理解すること、ね、これが修行なんだよ。いいかな。

そして、そのプラーナの質がね、高くなること、これを功徳を増したというんだ。そして、プラーナの質を低下すること、これを悪業を増したというんだ。そして、いいかな、ここが大事なとこだよ。だからこそ、地獄とね、それからスメー

ル山の天界と、その上の夜摩天ね、覩史多天ね、楽変化天ね、他化自在天と、あるいはブラフマンの世界と、あるいはヴィシュヌの世界と、あるいはシヴァの世界といった世界が存在するんだということ。

じゃあ、今わたしの言った意味はどういうことだ。わたしが、なぜ君たちに難しい話をしないかと、要するに高い悟り解脱の話をしないかというと、君たちが無智すぎるからだ。だれか、わたしが今言った意味はわかるか。

わたしたちの本体というものは、真我と、ね、それに感応したプラーナだという話をした。そして、徳が高いとどうなる。純度が高くなると言ったよね。そして、ということは軽くなるということだね。だから、当然上へいく。

では、煩悩性のチャクラは上か下か。

（弟子） 下です。

（尊師） そして、チャクラというものは、どうだ、プラーナと関係のある部分か、部分じゃないか。

（弟子） 関係がある部分。

（尊師）そして、わたしたちが上のチャクラを少しずつ少しずつ使っていくということは、どうなる。プラーナの質を？

（弟子）上げる。

（尊師）そして最後にだ、わたしたちがプラーナから解放されたらどうなると思うか。

（弟子）……。

君たちが、今日聞いた説法というのはね、これは、ヨーガの理論と仏教の理論が同一であるという、一つの証明の話なんだ。今まで、この話については、だれも説き明かしていない。つまり、修行者にとっては、最も価値のある話のはずだ。こういう話のときに眠気が出るということは、未来際において決して最終の解脱がないだろうと考えてよろしい。なぜならば、真我がそれを欲求していないからだ。

仏教では、これを先程言ったとおり、花と香りという表現を使っている。ヨーガでは、ね、それをプラーナと、それから、まあ五蘊という言葉は使っていない

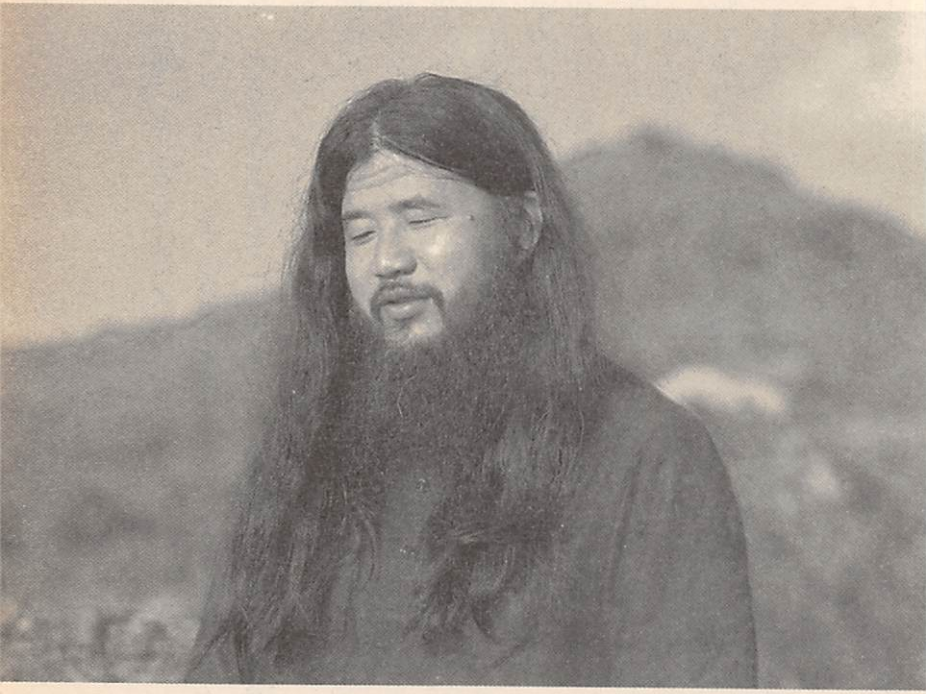
けど、例えば肉体とか心という言葉を使っている。しかし、これは同じだ。

そしてこれに気づくと、人間の本体、これは大した意味があるんではなくて、単なるカルマの産物なんであってね、今生でわたしたちが磨き上げていかなければならないもの、それはプラーナであるということがわかる。そして、一般にいわれている邪気というものは、そのプラーナのけがれた部分であると。理解できるか。

そして、人に対して判断をするとき、何をもって判断をしたらいいか。君たちが、もしプラーナを感じられるようになると、どうなる。その人が徳の高い人であるか、徳の低い人であるかわかるよね。どうだ。

◉神通とプラーナ

それからもう一つ、神通について少し語ろうか。例えば、他心、例えば、天眼、ね。もし、心の働きによってプラーナが動くとするならば、どうだ、他心通というのは、案外簡単だと思わないか。そのプラーナの動きを自分が読み取るように



なれば、当然他心通は生じるわけだよね。どうだ。

つまり、大切なことはプラーナの動きを理解する、まず訓練をしていくと。そして、高いプラーナを使う訓練をしていくと。どうだ。そして、最後はプラーナから解放されると。どうだ。

はい、では最後にだ、ということは、言い方を換えるならば、ここにプラーナがあって、そのプラーナは媒体であるということができるよね。それは、わたしたちの心を動かすものであるということができるよね、どうだ。逆に、わたしたちがそのプラーナを超越するならば、プラーナを動かすことによってすべてを動かすことができるということができるよね。どうだ。

はい、では君たちに質問しよう。マハーモッガラーナの話でね、マハーモッガラーナが入滅するとき、バラモンに命令された盗賊が彼を殴りつけて、そして、それによって、ね、入滅したということになっている。そのとき、マハーモッガラーナは、カルマの力によって神通を使うことができなかったとなっている。これはどういうことだ、今のプラーナの理論からいくならば。どうだ。

そのとき、個人のプラーナの流れではなくて、もっと大きな、宿命的なプラーナの流れがあって、その宿命的なプラーナの流れというものは、個人のプラーナの流れを阻害するのかしないのか、どっちだ。それによって、彼の心は、もっと大きなプラーナの流れに支配されたと。いいかな。ところが、仏陀釈迦牟尼はそういうことが一切ないということになっていると。これはどうだ。

◉求道心を持て

ここでね、大乗経典の阿羅漢と仏陀とは違うんだという話になってくるんだよ。まあ、この内容についてはちょっと難しいから、ね、また次回に話すことにするけども、君たちが、もしだよ、わたしはたくさん説法が聴きたいと、わたしは法を学びたいんだという気持ちを持って日々のワークにいそしんでいるとするならば、わたしは君たちにもっともっといろいろな話をするだろう。

しかし、そうではなくて、ああ、寝るのは楽しいと、食べることは楽しいと、供養を受けることは楽しいと、愛着することは楽しいと、現世のことを考えるこ

とは楽しいと、ね。このような修行者であってね、求道心のないような状態を、そのような心を君たちが持っているとするならばだ、わたしは、君たちに対して説法をすることができなくなる。

そして、それどころか、わたしの存在そのものの意味がなくなる。ということは、どういうことだと思うか。わたしの存在理由がなくなるということはどういうことだと思うか、君たちは。救済ができなくなる、わたしが涅槃するということだ。君たちが必要だと考えるならばここにいるだろうし、君たちが必要でないと考えるならばいてもしょうがない。

君たちは、類い稀な徳の持ち主であると。だから、同じ国の言葉を使って講話を聞くことができる。しかし、君たちは真理に対する求道心がなさすぎる。言い方を換えるならば、あまり苦がないんだな。デーヴァ的な要素が強すぎるんだ。

しかしそれは、ね、例えばだよ、欲六界の上にアストラルの世界があると。これは、大きく分けると七つに区分することができると、ね。小さく分けると、十七に区分することができると、ね。そして、その上のコーザル世界は、五十三に

ね、区分されていると。

例えば、わたしがそのような話をしたいと考えていても、そして、その世界に至るための道を君たちに説きたいと考えたとしてもね、君たちがもっともっと求道心を持たないと、君たちがすべての徳を、自己の霊的な向上のために、ね、意識を集中しないと、わたしは話すことができないんだ。なぜならば、そのようね、約束になっているわけだね。

そこをよく考えて、今日からね、一分、一秒たりともおろそかにせぬようにして、それに集中して道を求めてほしい。いいね。

はい、では、今日の話はこれで終わろう。

一九八九年四月二十日　富士山総本部にて

◆第三話　欲六界を超越し、ブラフマンの世界へ

「五蘊を滅する修行法」

◉五蘊を滅し、ブラフマンの世界へ

まず、仏教の根本経典である「サンユッタ・ニカーヤ」、あるいは「アーガマ」といわれているね、経典の中に「雑阿含経」というものがあると、ね。この『阿含経』というのは何かというと、「雑阿含経」、ね、それから、「中阿含経」、それから「長阿含経」、「増一阿含経」からなっているわけだけども、その中の「雑阿含経」の中にね、修行の方法が述べられていると。その修行の方法の中に、五蘊を滅する修行法が説かれていると。

この五蘊とは何かというと、わたしたちを構成するもの、わたしたちをこの苦

悩の世界に結びつけるものを五つに分けていると。

それは、一つは何かというと、色であると。色というのはね、この肉体を指していると、ね。第二番目の要素は何かというと、受であると。受というのは、感覚を表わしていると。三番目のものは何かというと、想であると。想というのは、これは、ね、わたしたちの表層の意識、普段思索している意識を表わしていると。そして、四番目の意識は行であると、ね。これは、わたしたちがあれをしたい、これをしたいと欲求する意志を表わしていると。そして、第五番目の、ね、識、意識、これは、意識、あるいは意思――意思というのは「意」に「思う」というね――とも採れるけども、要するにわたしたちのデータであると。

で、この五つが、わたしたちをこの苦しみの世界に結びつけているものだと規定しているわけだね。そして、この五つから離れ、この五つを滅するならば、わたしたちは梵行（ぼんぎょう）を立つことができると。梵行を立つとはどういうことかというと、梵行に立脚すると、ね。

では、この梵行の梵とは何かというと、ね、これは梵天のことであると、ね。

梵天というのを、サンスクリット語でいうならばブラフマンというんだね。

で、このインドの四つの階級の、ね、バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラという四つの階級、これは僧侶階級、軍人階級、そして商人階級、それから奴隷階級という四つの階級があるわけだけど、その中の一番上に位置するバラモン、このバラモンというのは、別の言い方をするならば、ね、ブラフマン階級といわれているんだね。

では、このブラフマン階級のブラフマンとは何かといったら、これはわたしたちの欲の世界を越えたところにある、ね、ブラフマンの世界というのがあるわけだけども、梵天の世界であると。つまり、ブラフマン階級の修行は、梵天に生まれ変わるための修行であると。そして、お釈迦様はね、先程言ったその五つの構成要素を滅するならばブラフマンに生まれ変わることができるといっていらっしゃるわけだ、ね。

◉天界の構造

では、そのブラフマン階級の下にはどういう世界が位置しているんだというと、要するに、わたしたちがよく知っている天界、ね、天の神々の世界が位置していると。その天の神々の世界には六つあると。

一つは、四天王であると、ね。第二番目は、忉利天（とうりてん）、あるいは三十三天といわれている神々であると。そして、この四天王と三十三天、この二つを地天といっていると。地天というのは地の天といってね、これはどういうことかというと、要するに、スメール山という特別な神々の山があって、ね、その神々が住んでいる、つまり地にね、足を着けて住んでいるということから、地天といわれていると。

そして、その上に、ね、夜摩天があると。この夜摩天というのは、ね、皆さんもよく知っている閻魔大王（えんまだいおう）の閻魔天と同じであると。で、これはわたしたちの死の裁きを行なう天であると。つまり、わたしたちのカルマを量って、ね、「はい、あなたは地獄へ行きなさい」と。「あなたは、人間に生まれ変わりなさい」と言

う神々であると。

そして、第四位には、覩史多とか、覩史多とか、あるいは兜率とかいわれている天界があると。この第四の天界は、仏教の菩薩方、あるいは修行者で真理を学ぼうとしている人たちが生まれ変わっていく世界であると。

これは、第一、第二、第三、第四と高くなっていくわけだね。

そして、第五番目が、楽変化天という世界があると。この楽変化天というのは何かというと、自在に自分自身でいろんなものをつくり出し、楽しむことのできる世界であると、ね。

そして、第六天界は何かというと、他化自在天といって、これは自分がつくり出すまでもないと。大変な徳の持ち主で、周りがいろんな、ね、欲を満足させてくれるものをつくり出して、満足させてくれると。

これが、天界の構造であると。

◉天界の下には

そして、天界の下には何があるんだといったら、そこには阿修羅の世界が存在していると。これはね、仏典によって、まあいろいろ記述が違うわけだけども、正確な表現をするならば、三十三天の山の下に、ね、地の王国というものがあると。その地の王国の住人、これを阿修羅であるといってると。

で、この阿修羅の住人は、大変正義感が強いと。真面目であると。しかし、自己の観念にね、凝り固まっているところがあって、要するに、正しくないものは一切受け入れられないと。正しくないものに対しては、即闘争を挑むと。これが阿修羅の世界であると。

そして、その下に人間の世界があると。もう人間の世界については、あまり説明をする必要はないだろうけども、要するに、この世界は情によってね、人の情によって、人と人とのつながりによって形成されている社会であると。よって、情によってものを正しく見ることができない場合が出てくると。それによって、わたしたちは苦しみに陥っていくと。

その下は、動物の世界であると。ここは単に、徳がないのに楽しみだけを求めている世界であると、ね。

そして、その下の世界は餓鬼の世界であると。餓鬼というのは何かというと、たとえ食べ物があっても、それを食べようとすると、例えば消化の炎で体が焼かれてしまうとかね、いった苦しみの世界であると。

そして、その下の世界は地獄の世界であると。この地獄というのは、一般的には三つに分けることができると。一つは、熱優位の地獄と。これは、皆さんもよく知っているね、例えば釜ゆでになったりとか、あるいは、ね、火の鉄板の上を歩くとか、いろんな話があるけども、その熱の世界と。もう一つは、寒冷の世界と、ね。これは、もう寒さがひどくて体が干割れてしまうと。そしてもう一つは、中間のね、痛み中心の世界と。

これが一応、欲六界といわれている世界であると。そして、その上にブラフマン、あるいはヴィシュヌ、あるいはシヴァといったね、アストラル世界が形成されていると。

そして、仏教の第一目的は、低位コーザルに入ること、あるいは上位アストラルへ入ることであると。ここまでは、まずいいかな。ちょっと早いかね。理解できましたか。

◉カルマの理論

そして、来月の『マハーヤーナ』（当時の教団の機関誌）から、『阿含経』についての解説を含めてね、いろいろと、あなた方が高い世界へ生まれ変わるための行法の伝授をしたいと考えています。

ただね、この五蘊を滅却するためには、どうしても出家をしなければならないと。それはなぜかというと、正見、正思惟、ね、正語、正業、正命、正精進、正念、正定といった、例えば八つの正しい道を歩くにしろ、ね、あるいは、七覚支の実践をするにしろだ、正しく思索する背景となっているものが仏陀釈迦牟尼の人生観だからであると。仏陀釈迦牟尼のカルマの理論だからであると、ね。

この、いったいカルマの理論とは何かというと、この世はすべてが苦であると。

その苦しみというものは、三つの条件によって構成されていると。一つは、苦そのものであると。もう一つは、楽しみが壊れ去るときの苦であると。もう一つは、求めて、得ることのできないときに生じる苦であると。この三つのカテゴリー以外に入るものは、あり得ないんだと、ね。

◉できるだけ高い世界へ

だから、ここに集まっている在家の方には、できるだけ高い世界へ生まれ変わるための、一つの話をしましょう。

仏陀釈迦牟尼の時代、在家の人には、五つの戒めを守りなさいと、ね、それから七つの徳を積みなさいということが一般にいわれていた。

持戒から説明するならば、持戒には五つあると。それは、まず殺生をしてはいけないと。盗みをしてはいけないと。それから、夫婦間以外のセックスをしてはいけないと。嘘をついてはいけないと。それから、酒を飲んではいけないという五つの戒めであると。

そして、この五つの戒めに二つを加え、五つの戒めを発展させたものをね、七つの功徳といっていると。それは何かというと、生き物を殺す殺さないだけではなくて慈しみなさいよと。優しくしなさいよと。盗みをしないだけではなくて、施しなさいよと、ね。そして、できるだけ性エネルギーを漏らしては駄目だよと、ね。それから、嘘をつかないだけではなくて、はっきりと正しく優しく語りなさいよと、ね。

それからね、もう一つは、粗末なベッドに寝なさいよと。これは、徳を減らしては駄目だよという意味なんだね。それから、一日一回の食事で満足しなさいよと。そして、心から貪りをね、捨てなさいよと。

この七つの教え、この七つの功徳、これを奨励していたわけだね。そしてそれと、あとは三宝に対する、つまり真理の体現者と真理と真理を実践している者に対する布施を、一生懸命やりなさいと。

◉徳の流れ

これによって、まず環境はどのように変わるかというと、まずお金持ちになっていくだろうと。今から言うことはね、次元が少しずつ高くなっていくから、そのように理解してください。つまり、お金持ちになるということはあまり次元の高いことじゃないんだね、現代では重要視されているけど。

次は、名誉を得るようになるだろうと。そして、ね、その次には高い地位を得るようになるだろうと。それはなぜかというと、周りから称賛される人物に変わっていくからであると、ね。

そして次は、もっと徳を積めば王様になるだろうと、ね。そして、それよりも徳を積むならば聖転輪王になるだろうと。これは、聖転輪王とかね、いわれているけどね。転輪聖王とかいわれているけど、転輪聖王、ね、聖転輪王になるだろうと。

そして、もっと徳を積んでいくならば、四天王衆天に生まれ変わることができるだろうと。それよりも徳を積むならば、ね、帝釈天に生まれ変わることがで

きるだろうと。この帝釈天というのは、先程言った三十三天の王のことだね。

そして、それよりも徳を積むならば、出家をして、ね、そして最終的な解脱に向かうであろうと。

これが、徳の流れなんだね。

◉三苦を超越して

では、なぜ出家をし、解脱をすることが最高の徳なのかといったら、先程も言ったとおり、この欲の世界というものは、三つの苦というものが必ず隠れていると、ね。それは、漢訳の言葉を使うならば、苦苦、行苦、壊苦といわれているものなんだけども、要するに、例えば叩かれたら痛いと、ね。例えば、焼かれたら熱いと。熱くて痛いと、ね。例えば、寒さは苦しいと。これが、ね、本質的な苦しみであると、ね。

二番目は、ね、今まで愛し合っている夫婦が、死に別れするときは苦しいと。あるいは、今まで大切に育てていた子供がね、男の子が嫁さんをどこからかもらっ

て去っていくとき、やっぱり寂しくて苦しいと。これが、破壊されゆく喜びから生じる苦しみであると。

そしてもう一つは、あれが欲しいんだけど手に入らないと。あの人と結婚したいんだけど手に入らないと、ね。これが、求めても得ることのできない苦しみであると。

この三つ以外の要素を含んでいる、欲界の喜びというものはないわけだね。

よって、解脱をするということは、最高の徳になるわけだ。その途中の段階で、ね、まずお金持ちになって、名誉を得て、高い地位に昇って、そして王様になって、ね、あるいは権力者になって、そして転輪聖王になってね、それから四天王衆天に生まれ変わって、あるいは帝釈天に生まれ変わると。そして、それよりも徳が高ければ出家して解脱をすると。

これが、仏陀釈迦牟尼が在家の方にお説きになったね、功徳と、それからその結果のすべてであると、ね。

そして、あなた方が、先程言った七つの功徳、ね、あるいは三宝に対する布施、

あるいは五つの戒め、これを守るならば、あなた方にとっては、ね、じわりじわりと、例えばだよ、昆布をだしにして煮出すのと同じように、あなた方の肉体、あるいは心に対して徳というものが染み込んでいって、最終的にはその徳の香りで、この人生、あるいは来世というものがね、素晴らしいものになるだろう。

一九八九年四月二十二日　横浜・ポアの集いにてにて

◆第四話　類い稀なチャンスを生かせ！

「マハー・ニルヴァーナへ到達する四つの条件」

◉四つの修行

君たちがマハー・ニルヴァーナに到達するためには、四つの条件が必要である。その第一は、しっかりとした信を持つことである。その信は何かというと、オウム真理教でいうならば、グル、あるいはシヴァ大神、諸々の仏陀に対して、心から信を培うこと。そして第二は、真理に対して、絶対的な信を培うこと。第三番目は、法友に対して、特に自己の霊性よりも高い法友に対して、しっかりとした信を培うこと。これが、第一の条件である。

で、この信とは何かというと、例えば自己の人生上の疑問、心の悩みなどがあ

るときは、相談をすると。じゃあ、例えば真理にはどのように相談するのかといったら、その項目を引いて、実際に調べると。あるいは、グルや大師に対しては、自己の今引っかかっていることについてお聞きすると。これをなす、これは第一の条件である。

次に、第二の条件としては、その真理をデータとしてたくさん入れると。これは試験もそうだが、全然勉強しないで試験に通るはずはない。それと同じように、真理のデータを入れないで、真理がわかるはずがない。よって、第二番目は、多くの法を聴き、実際に記憶することであると。

そして、第三番目には、その記憶にのっとり、考える。真理にのっとり考える訓練をすることである。よく、わたしの考えはこうというシャモンがいるが、そのわたしの考えというのは、現世で培った、貪り、嫌悪、無智にまみれた思考であると。よって、そういう考えは三悪趣に落とす考えであって、一切捨てなければならない。

あなた方がなさなければならないのは、その三悪趣から離れる、超える思索で

あると。そのためには、しっかりと経典を読み、あるいは説法を聴き、考えると。

そして、第四番目には、その聴いて考えたことを実際に実践すると。

そして、この四つを行なう者、この四つを行なう者は、間違いなく来世において、天界をぶち抜き、梵天をぶち抜き、福生天をぶち抜き、無熱天をぶち抜き、色究竟天をぶち抜き、そしてコーザル世界の空無辺、色無辺、有処無所、非想非非想天をぶち抜いて、マハー・ニルヴァーナへと到達する。

◉五つの構成要素の変化

それは、なぜであろうか。わたしたちを構成しているものは、五つの要素である。その第一は、この肉体、色であると。そして第二は、イメージであると。第三は、感覚であると。第四は、意志であると。第五は、意識、データであると。

そして、この五つの構成要素が、日々の教学、そして瞑想、そして実際に日々のワーク、そのワークも位置づけをしっかりと考えて行なうこと、これをなすならば、まず菩薩へと変わっていくと。次に、徐々に徐々に仏陀へと変わっていく。

そして、この五蘊が仏陀へと変わり切ったとき、その人は仏陀になると。

ではだ、ここにシャモンがいて、このシャモンが、そうではなくて、ワークのときに信をなくすような心を培ったと。ワークをしたくない、つらい、つらい、つらいと。現世はいい、いいと考えたと。果たしてこれで、このシャモンの五蘊は変化するだろうか。

次に、このシャモンの培った、例えば現世というものの構成は何かというと、欲望の集まりである。欲蘊であると。ということは、このシャモンは欲望を修習することになる。そして成就して、例えば落ちると。落ちたならばどうなるかというと、当然、貪、瞋、癡の煩悩は増大されるわけだから、三悪趣へと生まれ変わると。

つまり、四つの聖なる流れの実践を行なう者は、未来において、菩薩、仏陀へと生まれ変わる。あるいは、今生において、間違いなく菩薩として生まれ変わり、そして仏陀へと王手をかけることができると。

一方、教学をしないで、瞑想しないで、ワークのとき否定的想念を培っている

者は、間違いなく貪、瞋、癡を増大させ、三悪趣へと生まれ変わっていくと。

そして、この信を培う、教学する、そして教学にのっとり考える、実践する、この四つをなす者は、決定者、確定者といわれる。何に対する確定者かというと、未来において必ずや、阿羅漢、仏陀、如来として生まれ変わるということである。

そして、今君たちはその道を歩いている。この類い稀なチャンス、この類い稀な徳を生かし、しっかりと修行してほしいと思う。いいね。

一九九〇年八月一日　阿蘇・シャンバラ精舎にて

◆第五話　今生で人間を超えよ！

「不死に至る四つの実践」

◉不変・不死を勝ち取る真理

一切は無常である。シャモン諸君は、この無常という意味について熟考したことがあるであろうか。

今、オウム真理教と、そしてこの日本の社会とのぶつかり合いの背景にあるもの、それは宗教上の違いということができる。

では、いったい何が違うのか。それは、今の日本の社会は、唯物的自由主義と。あるいは、無常を目隠しし、常と見、この人間の世界において、いかに快楽を享受するか、五妙欲を満足させるかということが、この日本の社会を形成している

根本となっているものである。

そして、逆にオウム真理教は、原始仏教とあるいはタントラ密教をミックスした、無常を背景とした宗教ということができる。

これは、わたしの修行動機でもあるし、あるいはいにしえの仏陀方の修行に入られた動機でもある。それは、この無常の世界を出離したいと。そして、本当に壊れない、安定した、不変のものを勝ち取りたいと。あるいは、この病多き肉体、老い、死というものを超越した、ビビッドな、そして永続性のある意識状態に到達したいと。つまり、不死に到達したいと願うこと。そして、その実践、そして実際にその到達。これがオウム真理教の教えである。

そして、これは今組み立てられている、オウム真理教の修行システムを、確実に一歩一歩、歩を進めていけば到達できる、だれにでも手の届く世界なのだということを、シャモン諸君は理解しなければならない。

◉五取蘊を止滅せよ

ではいったい、何をなせばこの不死に到達するのか、あるいは何をなせば死に到達するのかということについて考えなければならない。

この不死と死という点については、死についてまず語った方が早いから、死について語ろう。

この形成されているわたしたちの肉体、あるいはイメージ、あるいは感覚、意識、あるいは意志といった、この五つの集まり、この集まりの存在こそが、わたしたちを死に至らしめる因である。そして、この五取蘊を完全に止滅することこそ、わたしたちが不死に到達するただ一つの道である。

そこには、純粋な、広大な、光り輝く真我しか存在しない。そして、それをマハー・ニルヴァーナと呼ぼう。あるいは、大いなる空性（くうしょう）と呼ぼうと。これが約束事なんだ。そこでの至福の状態、そこでの平安の状態、そこでの絶対的な安定の状態というものは、そこへ到達した者以外、理解することはできない。

◉「空」のすべて

では、不死とは何であろうか。不死とは、五取蘊を超越し、その後で出てくる最終の意識状態ということができる。では、なぜこれを不死というのだろうかと。それは、意識が連続しているからである。

例えば、君たちが多くの食べ物を食べると。眠たくなると。あるいは、邪淫を行なうと。眠たくなると。そして、実際寝ると。そのときは、ほとんど覚えていないと。一種の気絶状態であると。これが死である。この、短い時間の状態ではなく、長い時間の状態、そしてそこでのカルマの入れ替えが起き、新しい五蘊を形成する過程、これが死と誕生である。

そして、不死に到達した者は、この死、そして生というものをはっきりと覚え、自由にコントロールすることができる。そして、最終的にはこの五つの取蘊を止滅させ、そして永遠に生じない、永遠に滅しない、永遠に増えない、永遠に減らない、永遠に綺麗ともいえない、永遠にけがれているともいえない状態に到達すると。そして、これが『般若心経』の空のすべてである。

◉絶対的不死に到達するには

では、この空、あるいは絶対的な不死の状態へ到達するためには、何をなせばよろしいのかと。それは、不放逸を根本としている。不放逸とは何かといったら、それは、絶えず精神集中をし続け、気を配り続けるということである。

では、何に対して気を配るのかと。それは、グルの意思、グルの教え、それに対して気を配るということだ。そして、諸君の身・口・意、この三業が完全にわたしと合一したとき、そのとき君たちは不死を得ることができる。

では、そのためにはどのような実践方法があるのかと。それは、まずしっかりと、グル、あるいはシヴァ大神、諸々の仏陀に対して確信を持つと。強い信心を起こすと。けがれない心によって強い信心を起こすと。わたしたちが救われる道は、ただひたすら、グル、シヴァ大神、諸々の仏陀にすがることであると。その教えを実践することであると。これ以上の道はないんだと確信を持つこと。

そして、グルの説く法、あるいはわたしの提供する諸々の教えというものが、シャモン諸君を不死へ到達させるんだという自覚を持つこと。そして、先を歩い

ているスワミ（ラージャ・ヨーガの成就者）、あるいは師（クンダリニー・ヨーガの成就者）が、あるいは正悟師（マハー・ムドラーの成就者）が、あるいは正大師（大乗のヨーガの成就者）が、自己の道しるべであると確信を持つこと。そして、与えられた戒律をしっかりと守ること。これが、第一の条件である。

そして第二は、多くの説法を聴く。揺れたときに、自己のけがれた心によって考えるのではなく、教えにのっとり考えられるくらいの多くのデータを入れる。暇があればひたすら説法を聴き、本を読む。これが第二の条件である。

そして、第三の条件は、その教えにのっとり考える。周りの人を見る。例えば、揺れている人を見たら、この人はどの煩悩で引っかかっているんだろうかと。ああ、この人は、例えば地獄へ落ちるな、餓鬼へ落ちるな、あるいはこの人は一生懸命真面目に真理に取り組んでいるから、いずれ天へ生まれ変わるな、あるいは解脱するなと。そのような目で、絶えず観察する。つまり、四諦（したい）を背景として観察する。これが、第三の条件である。

そして、第四の条件は、その教えそのものを自己に体得する。すべての教えを

自分の中に内在させる。これが第四の条件である。

そして、この第一から第四の条件を絶えず繰り返し修行している者は、必ずや悟るであろう。必ずや仏陀になるであろう。必ずや如来（にょらい）へ到達するであろう。そして、神秘的ないろいろな力を有することになるであろう。

◉人間を超える

例えば、こういう例がある。これはCSI（コスミック・サイエンス・インスティテュート）の話だが、千五百ボルトの電圧が数秒間流れた者がいる。普通だったら、完全にショックを受けて死ぬはずである。ところが、ちょっとその部分が焦げただけですんでしまったと。これは、真理の実践によって、異常に意識がショックに強い状態をつくり上げていると。

似た話がある。これは、カール・リンポチェのグルであるカルマパという偉大なるグルがいたが、この人が亡くなったとき火葬したと。ところが、心臓だけが全く焼けず出てきたという話がある。

そして、君たちは今、今生でこの人間を超えなければならない。今生で人間を超えられない者が、来世、死を境に天へ生まれ変わることはあり得ない。君たちの死の前の状態がどれだけ天へ向かっているか、あるいは解脱へ向かっているかによって、来世は決定される。そして、時はない。なぜならば、いつ死が、死の大群が襲ってくるかわからない。

今ここで、貴重な修行のできるシャモンの皆さんの、これからの精進、そして修行に対する欲求を期待して、今日の講話を終わりたいと思う。

◉五取蘊の浄化——大切な日々の実践

最後に、瞑想とワークについて少し付け加えておきたい。

例えば、十波羅蜜の第一の布施波羅蜜について、諸君も知ってのとおり、自己のプライド、あるいは生命をも布施してしまうという修行法がある。そして、そこへ到達するために、多くのいろいろな身を供養する瞑想が行なわれるわけだが、君たちはどう思うか。この、多くの瞑想を行なっている者が、実際身を捨てるこ

とができなかったとしよう。もう一方は、平気で身を捨てたとしようじゃないか。どちらの方が十波羅蜜の第一である布施波羅蜜の達成ができていると思うか。どうだ。

（弟子）後者です。

そのとおりだ。

ワークもそれと同じである。いくら瞑想しても、実際に救済の側に立ってワークのできない者は、その瞑想が根づいていないということができる。逆にきちんと救済を意識し、グルを意識し、シヴァ大神を意識して実践できる者は、瞑想ができている者ということができる。

つまりそれは、既にもう心にその土台が根づいていて、そしてそれが表現として、実際の行為として表現できる状態まで達成しているということである。ということは、君たちがこのワークにおいていかに心を浄化するか、言葉を浄化するか、あるいは行為を浄化するかを意識しなさい。それが君たちにとって最高の瞑想である。

そして、その日その日の出来事において、自己の身・口・意の統御について達成されたかどうかを、この十時から十二時までの教学、および瞑想の時間で解決しなさい。いいね。

それを日々行なう者は、いいか、三年で達成されるといわれるクンダリニー・ヨーガの成就、これを一年で達成できるだろう。そして、それを日々行なっている者は、二年以内にはマハー・ムドラーの成就が訪れるだろう。いいね。なぜならば、自己の五取蘊を、日々浄化しているからである。いいね。だから、日々の修行、これを大切にしてほしい。

一九九〇年八月二日　阿蘇・シャンバラ精舎にて

◆第六話　菩薩の修行

「苦しみを乗り越える四つの土台」

◉多くの魂を利する——マハー・ニルヴァーナへ至る修行

チベットにパンチェン・ラマという菩薩がいた。このパンチェン・ラマは、アミターバ、つまり、今日本の仏教の主流であり、ほとんどの人が知っている南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏のアミターバ、つまり阿弥陀仏の化身、リインカネーション、トゥルクといわれている菩薩であった。

彼は中国人民解放軍の到来、その後の逮捕、そして拷問に耐え、片耳を失った。彼は、拷問を受けながら、他の人たちの苦しみを自分に来ますようにと。つまり、他のチベット人が苦しんでいるのを見て——もちろん自分も拷問を受けているわ

けだけど——その苦しみがすべて自分に来ますようにと、それを拷問をかけている中国人に言ったそうだ。

そして、このような菩薩の行為、これを行なう魂は、いずれ仏陀になる。必ず、マハーヤーナの仏陀、大乗の仏陀に至るためには、多くの魂の苦悩をしょう、あるいは多くの魂を利するプロセスが必要である。

それはなぜであろうかと。君たちも知ってのとおり、わたしたちの五蘊、つまりこの肉体、感覚、イメージ、意志、そして心のデータというものは、わたしたちを悪趣へと転生させる、あるいは、せいぜいが欲界の神、デーヴァに生まれ変わらせるためのデータしか存在していない。

その欲界をぶち破り、色界（しきかい）、つまり梵天の世界、光音天の世界、浄天の世界、そしてそれを超えた色究竟天に至る世界、あるいはそういう形のある有の世界をぶち抜いて、無色世界に入り、マハー・ニルヴァーナに到達し、そして、すべての魂を利するということは、それだけ大変な修行であるということだ。

◉オウム真理教の菩薩

オウム真理教の中では、アパーヤージャハ（正悟師）は偉大なる菩薩であるといえる。彼は、有能な弁護士でありながら、自己のプライドを満足させる職業を捨て、出家し、一切の報酬を受けず、信徒のため、そして内弟子のため、オウム真理教のために働いてきた菩薩である。

それだけではなく、彼は信徒時代に数千万のお布施をし、戒律を守り、教学をし、典型的な修行者としての生き方をなした魂である。わたしは、今オウム真理教の中で、彼ほど素晴らしい菩薩の素質を持ち、未来においてマハーヤーナの仏陀に至るかもしれないという魂を見たことがない。

菩薩には必ず、苦難、自己を捨てる、そういう場面が設定される。特に、徳の高い、未来において仏陀となっていかなければならない菩薩であればあるほど、難局を与えられる。諸君も知ってのとおり、出家して、わずか数カ月でクンダリニー・ヨーガを成就し、そして今、マハー・ムドラーの成就直前のアパーヤージャハである。

◉楽しみの背景にあるもの

わたしたちを構成しているもの、この五蘊、この肉体、感覚、イメージ、意志、意識というものは苦蘊とも呼ばれる。苦蘊とは何かというと、それは苦しみの集積、苦しみの集合体であるということである。

ではいったい、これがなぜ苦しみの集合体なのかというと、わたしたちの心が楽を求め、不善行をなし、そしてその集積の結果得た身体だからであるといわれている。もちろん、この人間の世界は、地獄、餓鬼、動物、あるいは地獄、動物、餓鬼――これはどちらでもいいけどね――人間という下から第四位の世界で、若干の楽しみのある世界である。しかし、その背景には、苦しみの生の連続である三悪趣に流転する条件を持ち続けているといえよう。

ところが、どうだ君たち、例えば、大きな借金をした者が、借金をし続け、生活を続けたとしようじゃないか。その人の生活が、たとえその瞬間瞬間が楽だとしても、その人の様子には、未来において相当に貧困という苦しみを味わわなければならない条件はそろっていると思うか、そろっていないと思うか。どうだ。

そろっているか、そろっていないか。そうだな、そろっている。

なぜ、そろっているかと。それは、楽しみの背景に、どんどんどんどん借金は蓄積されると。そして、これが一般の生き方。仏教語でいう凡夫というのは、一般の人という意味である。決して、蔑視した言葉ではない。

では、修行に入り、その借金を返し出した段階において、その人の生活は貧しいか貧しくないか。どうだ。当然、貧しくなるだろう。するとだ、その貧しさを端から見て、あの人は哀れだといった、ね、そういう言葉を吐いた者がいるとするならば、それは、正しいものの見方をしているか、していないか。そうだね。

つまり、その人は自己の苦蘊の借金の部分を一生懸命返している。どうだ、借金というものは、いつかはゼロになる。どうだ。ゼロになった段階で働き続けたら、どうなると思うか。そこには、功徳の集積しかない。そして、それが仏陀だ。これが大乗の仏陀なんだよ。ヒナヤーナにおける阿羅漢と仏陀の違いは、そこにあります。

◉真理――限りない輪廻の中で

オウム真理教は真理である。この世の中の、楽のために手段を選ばないという生き方を否定している。それは、オウム真理教の教えの背景にあるものが、生まれ、死にという、この短いタイムスケールを検討した結果得られた教えではなく、生まれる前から、生まれ、そして生き、そして死に、死後の世界と、そして生まれ変わるという、輪廻転生（りんねてんしょう）という長いタイムスケールを背景としたものであるからである。そして、この生まれ、死ぬというタイムスケールの中に存在するものは、本質的には苦しみしか存在しない。

よく、情というものは大切であるといわれる。じゃあだ、例えば、ここに愛する者がいたとしよう。その愛する者をひたすら愛し続け、どんどん深みにはまり、そして一方が死んだと。このときには、苦しみが残るか、楽しみが残るか。苦しみが残ろう。

では次に、相手を徹底的に愛したと。その相手が他の異性に心が奪われ、お付き合いをしたと。これについてはどうだ。では、異性の美しいスタイル、あるい

は顔に愛着していたとしようじゃないか。あるいは、精神的なものにひかれていたとしよう。例えば、その人がやけどを負ったり、あるいは精神的に狂いが出て、例えば精神病になったと。これは、苦しみか、喜びか。

ということは、この世の中における、例えば恋愛、愛情のパターンにおいて、楽というものが生起するかしないか。どうだ。いかなる形のものにおいても、必ず変化する。その変化のときには、その人は苦しまなければならない。これが、オウム真理教の真理、仏典に説かれている教えの根本にあるものである。

ところが、一般的にはそれを見ないように、聞かないように、感じないように、徹底的に叩き込まれている。ということは、現代の情報の流れとオウム真理教の教えというものは、同じ流れであろうか、違う流れであろうか。ということは、社会的に叩かれるべきであろうか、叩かれないべきであろうかと。

しかし、逆の見方をすれば、これが聖である。これが聖である。これが聖の教えであると。しかもそれは、わたしはまだ、三乗の教えの中のヒナヤーナの原則的な教えしか、今ここで話していない。ということは、この上に立脚する崇高な

マハーヤーナの教え、あるいはタントラヤーナの教え、この教えを一般の人が理解できるだろうかと。

◉久遠の至宝――法の実践

君たちが、今のオウム真理教の流れにおいて、苦しめば苦しむほど、君たちの心のけがれというものは浄化されるはずである。その状態において信を持てば持つほど、君たちの心というものは、苦しみに対して適応できる心の状態をつくっていくはずである。

例えば、ここにボクサーがいたとしようじゃないか。このボクサーは、典型的なフットワークの練習しかしなかったとしよう。このボクサーは、本番でそれを使うことができるだろうか。どうだ。そのパターンに合った場合のみ、例えばジャブを出し、ストレートを出し、使うことができる。しかし、例えば相手がいろんなフットワークを使い、いろんな攻撃をしたならば、それに対応はできないはずである。そうだね。

それと同じように、菩薩の修行というものは、いろいろな苦しみに対して対応し、その苦しみを一つ一つ乗り越えていくことが修行である。そして、それを達成するためには、四つの土台、四つの修行を貫徹するための土台の実践を行なえばよろしい。

それはまず、シヴァ大神、仏陀、グルに対して、あるいは大師に対して信を持つことである。次に、その魂に対して、できるだけ多く接し、教えを聴くということである。現代においては説法テープ、あるいは『マハーヤーナ』等の本があるから、あるいは説法会があるから、それを利用し、何度も何度も耳に刻み込み、今自分の持っている現世的な幻影を打ち砕くデータを入れることである。

そして、第三番目には、その真理によってね、一生懸命考えてみると。例えば、ここに生き物がいて殺したと。わたしはこの生き物によって、害を受けないと。しかし、それによってわたしの肉体を構成している苦しみの集合体というものは、少しは減るんだろうかと考えなさい。当然、減らないはずである。

例えば、お腹がいっぱいなのにいろんなものを食べると。わたしは、これを食

べることによって、せっかく修行によって培った火元素を弱めているんじゃないかと考えなさい。

このような形で、真理によって、教学によって考える。これが三番目の、最終の解脱をしていくための土台である。

そして四番目は、考えたならば、それを実際に実践する。信徒の場合、六つの極限を徹底的に行なうことによって、早くクンダリニー・ヨーガまでの成就を行なう。六つの徹底はわかっているね。布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禅定（ぜんじょう）、智慧（ちえ）という大乗仏教の典型的な六つの修行法である。

そして、その六つの修行法を支えるものは何かといったら、先程言った四つの、まず信を持つこと、多くの法を聴くこと、その法によってものを考えること、そしてそれを実践することの、この四つ。これを土台としなさいと。

そして、それをなすならば、いかなる状況に追い込まれようとも、外的条件の制約を受けず、自由な心、幸福な心、歓喜の心を持ち続けることができるはずである。

仏教の教えの根本は、外的条件に対して一切心を乱さないということが、その教えの真髄である。君たちは、もし、今までのいろんな事象に対して心が乱れたのなら、それはザンゲする必要がある。そして、今日この瞬間を境に、もう一度教学をやり直し、もう一度考えることから始め、そして法の実践を行ないなさい。いいね。

死後の世界を知っているのは、今のところオウム真理教において、というよりも日本において、正悟師以上以外、本当の意味で知っている人はいない。だとするならば、確信を持ち、ついてきなさい。いいね。

君たちの死後、わたしが君たちのバルドーの案内をし、そして君たちをきちんと弁護し、君たちが法の実践を一生懸命行なったならば、必ずや高い世界へ導こう。いいね。

今日、これを境に、しっかりと四つの土台、四預流支（しよるし）の実践を行ないなさい。いいね。そして、生きていること、生きていることの意味合いを考え、六つの極限を徹底的に行ないなさい。いいね。

自己を奮い立たせ、真理に向け、真理を土台とし、全力で生きなさい。いいね。それをなすことが、君たちの未来際においての、いや、久遠の至宝であると。これ以上にない宝であるということを認識し、実践することを祈り、今日の講話を終わりたいと思う。

今日を境に、いいですか、徹底的に真理を流布しなさい。必ず、シヴァ大神、諸々の仏陀、そして、グルの祝福があるはずです。しっかりやりましょう。

一九九〇年十月二十七日　名古屋支部にて

◆第七話　より良い転生のために

「全力で真理の実践を」

◉死――バルドーでの救済

昨日、この福岡支部道場の担当であるタントラシァーキニー（師）と電話で話した際、彼女が山口から福岡へ帰る途中、彼女の車の近くを走っていた車が犬をはねたと。そして、その犬の死をじっと見守って、マントラを唱えてあげたという話を聞きました。

なぜ犬がはねられたのか、なぜその場にタントラシァーキニーがいたのかと。わたしはそれに対して、それはシヴァ大神の祝福であると。なぜならば、タントラシァーキニーに死というものを目前に見ることによって、人生の生き方という

ものが変わるように示唆を与えてくださったんじゃないかなという話をしました。

実は、一昨日、信徒の女性が不慮の事故で死にました。それはどういうことかというと、ある行法を風呂の中でやっていてね、ちょっと夫である方がガラスを押した際にそのガラスが割れて、そのガラスがわき腹に刺さり、そして動脈を切り、そのまま死んでしまったと。

で、その女性の信徒は、今までイニシエーション、それから瞑想、それから功徳といったこの三つを積んでいた在家の信徒です。当然、縁の深かったサクラー正悟師、それから、もちろん根本グルであるわたしのもとに、その魂は来ました。

どういう現象が起きたかというと、サクラー正悟師の場合は、アナハタ・チャクラがすごく痛くて痛くてたまらなかったと。わたしの場合は、苦しくて苦しくてたまらない状態であると。

で、実は、前回バルドーのイニシエーションを受けていた彼女は、もちろんそのとき、その状態が第一番目の空の状態――つまり、死後到来するシパ・バルドーという中間状態があるわけだけど――その空の状態であるということを、彼

女自身認識したみたいです。しかし、自分自身の幻影、あるいは殺されたかのように感じた恨み、このへんで彼女の心は相当苦しんでいたと。

で、相談を受けたわたしは、即、ポアの瞑想に入りました。そして、そうだね、十分間ぐらい、彼女に関していろいろなアドバイスを、アストラル次元を通じて、つまり中間状態を通じて指導しました。

すると、サクラー正悟師の胸のつかえが切れ、そしてわたしの胸の苦しみが切れ、それから、結果的に死なせてしまったご主人の後悔の念というものがすっきりしたというかね、そういう状態になったと。で、彼女は最も阿修羅に近い人間の世界に転生するということで中間状態を終わりました。

◉二つの死——真理の実践者の場合

では、なぜ彼女は中間状態をスムーズにクリアできたかというと、今までオウム真理教の教えというものをしっかりと学び、実践し、功徳を積んでいたということです。

これだけ叩かれながらついてきている信徒、これだけ叩かれながら、一生懸命真理を実践していた信徒。もちろん、ね、信があるかないかわからないような信徒の場合は、そういう中間状態に入ったら苦しまなければならない。それは仕方のないことだ。しかし、彼女のようにしっかりと修行した者は、必ずグルがそこへ登場し、そして済度することになっています。そして、その兆候として、そのご主人は出家したいという気持ちが固まってきているということです。

同じ例が、二例ぐらいある。その第一の例は、これは肝臓ガンで亡くなったある信徒さんだけどもね、その人は、とにかく極限の布施をなさり、そして必死にＡＨＩ（アストラル・ホスピタル・インスティテュート）で、欲如意足（よくにょいそく）という特殊な瞑想があるわけだけど、それを実践し、それから人工トゥモをね、行なうことによって、肝臓のガンを完全に殺してしまったと。

そして、肝臓のガンが消えた瞬間に亡くなられたと。いや、正確にいうと、意識不明になったと。で、わたしがそこへ行き、そして意識を呼び戻しました。で、半日ぐらいかな、意識があって、それから亡くなられたと。それと同時に、わた

しも意識がアストラルへ入り、そして彼の場合は、期間的には信徒として短かったけど、極限の布施、極限の修行という効果がね――これは三カ月ぐらい集中的に行なったわけだけど――奏して、阿修羅の世界へ生まれ変わったと。

それから、もう一つは、これはニューヨークの信徒さん。ニューヨークの信徒さんのお母さんがガンであったと。で、そのガンのお母さんが非常に苦しんでいたと。で、死なすこともできないと。それから、苦しみから抜け出すこともできないと。

で、これは、今ニューヨークにいるマハーカッチャーヤナ師がわたしに連絡を取ってきたと。では、とにかく布施をさせなさいと。そして、そのニューヨークの信徒さんがオウム真理教に布施をして、その布施がわたしに届いた瞬間に、お母さんは意識がなくなり、死んだと。これは要するに、その苦しみのカルマが切れ、ポアされたわけだね。

◉オウム真理教の存在理由

オウム真理教がこれだけ叩かれながら存在している理由というのは、その神秘性にあります。では、なぜオウム真理教が神秘的なのかというと、それはひたすら修行し、ひたすら教学をし、真理とは何であるかと、そしてどのような生き方、どのような実践をすれば生と死を超えてすべてを見通す力が生じるのかということを理解できる、日本におけるただ一つの宗教だからである。

ということは、言い方を換えれば、この世を支配しようとしている悪魔にとって、オウム真理教はあってはならない宗教ということになる。なぜならば、悪魔は、この現世的な力というものを最高の武器として、わたしたちを支配しようとする。ところが、オウム真理教の教えは、生まれる前、死んだ後という、つまり生まれる前から、生まれてから、死んでからという三つの流れを通して、絶対的真理というものを説きます。ということは、悪魔の教えと反するわけだね。

ところが、例えばここにいる福岡支部の人もそうだけど、心に悪魔の巣食っている人たちは、どうしても自己の悪魔的煩悩に支配され、何が真実で何が真実で

ないか見分けがつかなくなってしまうと。本当は、あなた方の目の前にあなた方をいかなる環境であろうと、絶対的な自由・幸福・歓喜に導く、オウム真理教の教え、オウム真理教の教えがあるにかかわらず、それに目が行かないと。実践できなくなってしまうと。

菩薩の修行とは何かというと、教団の出家したサマナのために自分自身を捨てると。自分自身を犠牲にして真理を実践すると。それをなすことによって、多くの魂が利されるとね。

そして、そういう指導的立場にある菩薩を大量に抱えているオウム真理教の信徒である、今の福岡支部の皆さんは、いったい何を考え、どのようにして生きなければならないか、あるいは何を人生の根本とし、どう実践するのかということは、やはり今日のポアの集いを境に考える必要があると、わたしは考えます。

◉五蘊——苦しみの集まり

仏陀釈迦牟尼の教えの中に、こういう言葉がある。わたしたちのすべてを形成

している五つの集まり、つまり五蘊というものは、苦の集まりであると。だから、この五蘊は苦蘊と言い換えることができると。

それは何かというと、例えば、この肉体は必ず生まれ、そして若いときはいいけども、老い、死んでいくと。これは苦しみじゃないかと。

感覚はどうかというと、喜びが強ければ強いほど、快楽が強ければ強いほど、苦痛も強いじゃないかと。あるいは、快楽を求めた場合、それはある段階で飽き、そしてそれ以上の快楽というものを求め続け、結局飽くことなく感覚を追求しなければならないと。それと同時に、反対側の感覚である苦痛というものは増大するじゃないかと。

イメージはどうかというと、選択していいイメージだけを入れるということはできないと。当然、自己を苦しめるイメージもどんどんどんどん入れなければならないと。よって、このイメージも苦しみじゃないかと。

意志はどうかというと、確かに自己の思ったとおり人生が動いてるときはいいと。しかし、そうじゃないときは苦しみじゃないかと。よって、この意志も苦し

みであると。

では、本質的な意識はどうかというと、否定的想念、あるいは破壊的想念という言葉があるとおり、わたしたちの心の中には、多くの苦しみを生起させる、苦しみを生み出すデータが入っていると。

ということは、この肉体、感覚、それからイメージ、意志、意識という五つの集まりは、すべて苦しみであると。

この苦しみを超越するためにはどうしたらいいのかと。そのためには、まず苦しみの本質である楽を求める心――しかも、それは間違った考え方による楽を求める心――これを止め、滅するしかないんだよと。喜悦することによって、喜びを貪ることによって苦しむんだよと。よって、喜びを求めるのではなく、今、生じている苦しみを静めていくこと、これのみが本当の意味でのわたしたちを絶対的平安、安らぎの境地に導くんだよと。

◉死に対してどう生きるか

では、そのためにはどういう実践があるのかといったら、それは四つの預流から等覚に至る道があるじゃないかと。それは何だと。

まず、根本グルであるシヴァ大神、あるいは諸々の仏陀、あるいはグルに対して、絶対的な信を持つということ。

そして、『マハーヤーナ』あるいは説法テープ等を何度も何度も熟読、あるいは何度も何度も聴くということ。

そして、それを聴いたら、次はそれについて考えると。自分の身の行ないについて、言葉について、心の働きについて考えてみると。

そして最終的には、第四番目として、それを実践すると。

この四つを実践してこそ、つまり四つの預流支を実践してこそ、本当の意味での聖なる流れに入り、そしてマハー・ニルヴァーナへと到達するんだと。

そしてね、あなた方は信徒として、毎月これから書店に並ばない『南伝大蔵経』の経典や、あるいは講話集、こういうものをどんどん読むことができると。そし

て支部に来れば、出家した弟子がいて、いろいろ相談に乗ってくれると、ね。

素晴らしい条件があるにかかわらず、その条件を見ず、現世的な煩悩に巻き込まれ、そして先程も言ったとおり、気づいたときは死んでしまうと。そこで後悔すると。わたしはオウム真理教にいたと。しかし、実践しなかったと。実践しないがために、わたしは今、苦しまなければならないと。いったい、このときどうしたらいいんだと。

今、例えば、ね、チョンイ・バルドーだけども、どうしたらいいんだと。どの光を選択したらいいんだと。どのヴィジョンを選択したらいいんだと。あるいは、どういう瞑想をしたらいいんだと、このときにと。どうだろうね、いったい。この中で何人の者が、それを正確に選択し、そして正確に自分に合った輪廻転生をすることができるんだろうか。

わたしは、あなた方に絶対的な利益を与えるために、今ここにいます。その絶対的利益とは何かといったら、要はその総集編である死に対してどう生きたらいいかと。どうそれを乗り越えたらいいかという、日本でただ一人あなた方に正し

い道を指し示すことのできる者だと確信を持っております。

◉瞑想・功徳・教学――高い世界へ生まれ変わるために

よく、こういう話がある。他の教団ではもっと楽な修行があると。オウム真理教の修行はつらいと。でも、どうですか、よく考えてみようね。例えば、小学校のかけ算、割り算ができないで、大学の微分・積分ができるかと。あるいは、キーボードの使い方がわからないでワープロが打てるかと。

あるいは、音楽のドレミファソラシドを知らないで楽器を弾くことができるかというのと同じように、あなた方が、もし死ぬ前の段階で、地獄に至る道、餓鬼に至る道、動物へ至る道を完全に捨断（しゃだん）し、人間、阿修羅、天界の意識状態にあると。あるいは、人間、阿修羅、天界の、実際に力が生じているという状態を持って初めて、あなた方は来世、人間、阿修羅、天界へ転生することができます。

つまり、ハードな修行をし、ある程度の神秘的な力があって初めて、ね――まあ、人間はともかくとして――阿修羅という天界、それから戯忘という天界に生

まれ変わることができるんだと、そういう状態でなければ生まれ変わることができないんだよということを認識しなければならない。

そして、そのための法はここにある。そのための実践はここにある。また、皆さんが日々の生活の中で身・口・意の統御をし、そして瞑想に励み、功徳の実践を行ない、教学をなさり、自己をひたすら高めよう、自己をひたすらグル、シヴァ大神、諸々の仏陀に近づけようという気持ちを持ち続けられるということを願い、今日の講話を終了します。

一九九〇年十一月十八日　福岡支部にて

◆第八話　苦しみからの脱却

「大いなる徳を持て」

◉確実に存在するカルマの法則

今日は、まず初めに、ちょっと難しい話から入りたいと思います。これは、今日、先程わかったことだから、あなた方が初めて、オウム真理教のわたしの信徒として聞く内容ということになる。

人間の苦しみというものは、この五つのスカンダ、つまり集まりに集積されている。五つの集まりとは何かというと、この肉体、感覚、イメージ、意志、意識という五つである。

そして、オウム真理教にはいろんな修行法がある。今日、わたしはヴァジラヤー

ナの帰依という、これは竹刀で叩きながら帰依マントラを唱えるという、まあ特殊な方法だけども、これを行なった。これを一万発、だいたい一時間半ぐらいで一万発、自分の両足を力強く叩くわけだけどね、するとどうだろうかと。叩く前、いろんなナーディーの詰まりがあって、そこに痛みが生じていたと。ところが叩いた後はそれがかゆみに変わったと。

なぜ、痛みがかゆみに変わったんだろうかと。それで、今日わたしと一緒に同行している、皆さんもよく知っているヴァジラティッサ師、彼はドクターだけども、彼とそれについて話し合ったと。

そうすると、痛みというのはかゆみというのと同じ神経で感じるんだということがわかった。つまりどういうことかというと、同じ神経で、その刺激回数が少なければかゆみとして感じ、多ければ痛みとして感じるんだと——まあ、これはちょっと複雑な変換、つまり積分を使って行なうわけだけども——という話であると。

ということは、叩いたことによって肉体のカルマが落ち、そして痛みからかゆ

みに変わったということを表わしているんだということである。

ということは、仏教観でいうところのカルマの法則というものは、また一つ証明されたなと。わたしはそれを知ったとき、わたしの心に光明が射し、そして絶対的な確信、これは何としてでも皆さんに真理の法を根づかせ、そして正しい転生をさせなければならないという思いに至ったのである。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けらんない。どんなに大金持ちでも、あるいはどんなに異性にもてる男性や女性であったとしても、あるいはいくら愛し合っている夫婦であったとしても、あるいはどんなに高い地位へ昇ったとしても、人は必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。

では、死に対して何が有効かというと、先程述べた真理を絶対的に確信することであると。これが、例えばね、わたしが叩くことによってかゆみが出るというふうに知っていたならば、あるいはそうなるべきであるという暗示があったならば、今日わたしが一番初めに話したことは成立しないかもしれない。しかし、わたしはそれを知らないで、その理法を得たわけである。

◉来世は決定されている

例えば、これはちょっとバルドーのイニシエーションとも関係するわけだけども、人間が死ぬ前に、苦しい、苦しい、痛い、痛いと言いながら死んでいくと。そして死んだと。霊能者のとこへ行くと。「あなたのおじいちゃんは天界へ行きましたよ」と。君たちはどう思うか。死ぬ寸前に苦しみの集積であった肉体を持って死んだ者が、天界へ行くと思うか。当然これは地獄へと落ちる。

ではだ、ガンの患者で、食べ物が食べたくても食べられないと。そして、食べたい食べたいと思いながら死んでいく魂があったとしよう。これは、どこへ生まれ変わると思うか、君たちは。当然、次の転生は餓鬼であると。

では、年を取り、あるいは年を取らなくても、老人性の痴呆症、あるいは若年性の痴呆症となり、記憶が途絶え、ものが考えられなくなり、情報に流され、刺激によって動く状態で死んだとしよう。これは、どこへ生まれ変わるだろうか、君たちは。これは当然、動物へと生まれ変わる。

同じように、執着を背景とした場合、人間として生まれ変わり、あるいは純粋

に論理性、平等性を持って死んだ場合、憤怒天へ生まれ変わると。そして、徳とともに快楽を求めて死んだ場合、これは戯忘の世界へと生まれ変わる。

あるいは、貪りを離れ、離貪（りとん）した状態で転生した場合、梵天界へと生まれ変わる。あるいは、生存に対する、全く欲求を持たない状態で転生した場合、無色の世界へと生まれ変わると。

つまり、わたしたちが死ぬ寸前に、どのような心の状態で、どのような言葉の状態で、どのような身体の状態で転生するかということは、次の生を決定する絶対的現象であるということである。つまり条件ではなく、もう既に死ぬ寸前に、その人の次の生は決定されているんだということを理解しなければならない。

◉注がれる神聖なエネルギー

ここでいくつか、オウム真理教の教えが真理であり、そして、オウム真理教の発するエネルギーが神聖なものである証明をしたいと考えます。それはまず、十月のころだったか、これはニューヨークの信徒のおばあちゃんが、「痛い、痛い。

苦しい、苦しい」と言って、この人はガンに侵され、そして苦しんでいたと。そして、モルヒネ、つまり麻薬を打ったとしても一時的には止まるが、どうしようもない状態であったと。そのおばあちゃんを動かすこともできないと。

そして、信徒さんは「何とかしてください」という相談があったそうだ。わたしは、無償の布施を勧めた。ところがである、そのニューヨークの信徒さんが無償の布施をオウム真理教に送り、オウム真理教に着いてわたしがそれを知ったその日に、そのおばあちゃんは苦しみから解放され、安らかに息を引き取ったそうである。これは何かというと、その肉体の苦しみ、肉体の苦しみの地獄から解放されたわけである。

あるいは、八月の頭、これは肝臓ガンで苦しんでいた人がいたが、極限の布施、そして入院、特殊な治療等を行なうことによって、その肝臓ガンの細胞が完全に死滅して、その肝臓ガンのカルマが切れた瞬間に、その人は阿修羅の世界へと旅立ったと。つまり、人間より一つ上の憤怒の世界へと旅立ったと。

もちろん、その人の死ぬ前の状態はどうだったかというと、例えば無意識状態

になっても、ね、わずか数カ月でだよ、マントラが出てきたり、あるいは詞章が出てきたりするような状態であったと。そして、そのような状態までこの五蘊の意識が変わって、本来は餓鬼の世界へ生まれ変わらなければならないはずのカルマが、なんと憤怒天の世界へ生まれ変わったわけである。ね。

このような例はたくさんあります。例えば、前回の十一月の三日のバルドーのイニシエーションを受けた信徒さんが、不慮の事故で亡くなりました。そのとき、わき腹を切り、動脈から出血し、即死したそうだ。その彼女は苦しみ、縁の深かったサクラー（正悟師）のもとへ行き、そしてわたしのもとへ来たと。

わたしは、彼女がバルドーのイニシエーション、それから小乗のツァンダリー、それからオウムでいわれているほとんどのイニシエーションを受けている人で、真面目に修行している人だったから、特殊な瞑想を与えた。その瞬間、その事故を起こした相手に対する恨みが消え、安らぎ、そしてポアされたと。彼女は、人間としても修行者の子供として生まれ変わるカルマを持ち、転生しましたと。

これは、わたしが皆さんに、感覚で話しているわけではないということだ。つ

まり、わたしは見、感じ、聞き、話しているんだということである。

今わたしは、祝福、あるいは永代帰依祈願といったような形でエネルギーを移入している。あるいは、飴のイニシエーション、ミラクル・ポンド等のエネルギー移入を行なっている。当然、これらのエネルギーの移入と同等に、それを使っている人たちのカルマが、わたしの中にどんどん蓄積されてくる。

そして、そのカルマは、わたしは叩くことによって、あるいは七〇度、八〇度の熱を加えて焼くことによって、今消滅しています。そして、わたしがあなた方のカルマをしょい、消滅することが、あなた方の輪廻転生に対して、あるいはこれからの人生に対して、必ずやプラスになるということを確信してそれを行なっています。

◉在家信徒がなすべきこと

では、信徒であるあなた方は、何を行なえばいいのかということである。これはまず、ベースとなる八つの実践を行なうべきであると。

では、その八つの実践とは何かというと、まずグル、シヴァ大神に対する絶対的な心をもって帰依をすることである。帰依というのは何かというと、その教えを学び、考え、実践する。そして、供養すると。これは布施、奉仕のことである。

同じように経典に対して絶対の信を持ち、そして帰依をするべきである。これは何かというと、その経典を読み、考え、実践する。そして、その経典が広まるように法施の実践を行なうということである。

次に、わたしの弟子に対して帰依をするべきである。これはどういうことかというと、できるだけ道場へ通い、自己の疑問を解決し、そして奉仕活動を行なうと。これが、ベースの三つの実践であり、三つの功徳であると。

では、第二段階の功徳は何であろうかと。これは、残り五つということになる。それは、殺生を離れ、生き物すべてに対して慈しみを持つこと。優しい心をもって生き物と接すること。盗みを離れ、優しい心をもって同胞と接するということである。そして、邪淫（じゃいん）を離れ、異性を自己のものと見ず、心から和合して生きるということである。

そして、第七番目は嘘を離れ、真理にかなって言葉を話すということである。そして、第八番目は酒、タバコ、梅酒等、自己の心を薬物によって乱さない、そして、絶えず安定した優しい心をもって周りと和合するということである。

つまり、前者三つはあなた方のエネルギーを蓄えるということ、後者の五つはあなた方のエネルギーを漏らさないようにし、そして心を成熟させるという修行となっていく。

これら八つの実践をなすこと、これは、すなわち四預流支とつながってくる。つまり、グル、真理、そして弟子のグルに対する絶対的な帰依を養い、その法を学び、考え、実践するという四預流支である。そして、この四預流支の在家の実践が、先程言った八つの功徳である。

殺生しないことを、あなた方は悪業をなさないことと考えるかもしれない。それは正しくない。これは、積極的に見るならば、殺生しないではなく、殺生をせず慈しむと。よって、悪業をなさないではなく、心に功徳を積むということなのだ。

そして、わたしたちはこの肉体を持っていけるわけではないから、来世は心しか持っていけないから、その心をいかに成熟させるか、また心を成熟させることのできる、実践ができる功徳を蓄えるかということがポイントとなってくる。

そして、功徳を蓄えるその修行は、先程言った、グル、真理、そして弟子のグルに対する徹底的な帰依であると。それを漏らさず発展させるのが、殺生を離れ、偸盗（ちゅうとう）を離れ、邪淫を離れ、妄語を離れ、そして酒、タバコ等の心を乱すものを離れるということである。

「そんなこといっても麻原、俺はつらいよ。それじゃ生きていけないよ」というかもしれない。まずは、あなた方ができる、グルに対する帰依、次に真理に対する帰依、そしてサンガ、つまり弟子のグルに対する帰依の実践から、一つ一つ下から固めていくならば、いずれはこの八つの実践ができるはずである。

そして、この実践に到達するならば、あなた方の五蘊、つまり肉体、感覚、イメージ、意志、意識に蓄積されている悪業が増大せず、徐々に徐々に減少し、今日初めに話したように、痛みがかゆみへと変わり、そして最終的には苦しみから

解放され、人間、憤怒天、そして戯忘天へと転生できるはずである。

◉今から死への備えを

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けらんない。死を見なくても死ぬ。死を見ても死ぬ。だとするならば、今から死に対して何をなせばいいのか、死に対して何を準備すればいいのか、死に対して何を実践すればいいのか、しっかり考えて実践してほしいと思います。

そして、この輪廻転生を絶対的にするためにはどうしたらいいか。それは、功徳、教学、そしてカルマ落とし、そしてイニシエーションを受け、しっかりと高い瞑想をすることであると。この四つを肝に命じ、この一生で自分自身の魂のベクトルを三悪趣から解脱へと、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと向かうように、心をチェンジしていただきたいと思います。

わたしも、あなた方のカルマをしょえるだけしょいたいと考えている。そして理想としては、肉体はボロボロでも心はそれに対して平然としていられる、真の

大乗の仏陀でありたいと。そして、すべての魂の苦しみが自己の内側に内在し、すべての魂が苦しみから解放され、マハー・ニルヴァーナに到達するまで、このサンサーラ、六つの欲の世界、苦しみの世界へと転生を続けていきたいと考えています。

さあ、しっかりと真理の法をここに根づかせ、大いなる光明、大いなる光を発し、多くの人たちが真理と巡り合うよう心から祈り、今日の講話を終わりとしたいと思います。

一九九〇年十二月二十三日　仙台支部にて

◆第九話　五蘊を神々へ

「マハー・ニルヴァーナへ至る道」

◉仏教――すべてを包含する教え

人間の一生というものは大変短い。そして、その間に多くの経験をし、その経験を昇華させる形で次の転生がある。

オウム真理教の基本的教義のバックボーンの一つ、パーリ仏典『南伝大蔵経』、この『南伝大蔵経』のお経の骨子の約八割は、人がどのようにして生きるならば本当の意味での幸福・自由・歓喜の世界へといざなわれるのかと、この教えに約三百数十ページのお経の、四十数冊がそれに費やされている。

そして、その基本的な原則は、皆さんもよく知っている四つの預流支である。

この四つの預流支は、わたしたちを最終的にはマハー・ニルヴァーナへと導いてくれるということになっている。

この、マハー・ニルヴァーナへ最終的に導いてくれるということはどういうことかというと、この四つの預流支が、結局、わたしたちを形成している五蘊を少しずつ少しずつ神々の身体に変えていき、そして、その実体のない心の状態、空に到達させ、その空の広がり、あるいは深さが、最終地点へと到達し、すべてを包含し、そしてマハー・ニルヴァーナへと至るという教えなのである。これが仏教である。

そして、この仏教の教えの中に、キリスト教も、あるいはユダヤ教も、あるいはイスラム教も、あるいは他の神道的な教え、他の大乗仏教の一部の経典、これもすべて含まれるのである。

◉光へと変えて——

それはなぜかというと、わたしたちを構成しているものは、小乗の仏教であれ、

大乗の仏教であれ、五蘊以外考えられないからである。

この五蘊とは、皆さんもよく知っている、色、これはわたしたちの肉体、形のあるもの、これを色といいます。

受、これは感覚、例えば目でものを見る、耳で音を聞く、舌でものを味わうといったようなもの。

想、これはイメージである。わたしたちが、例えば「ラクダ」という名前を聞いたときに、パッとラクダの形が浮いてくると。あるいは、「悪魔」という名前を聞いたときに、日ごろ培っている正しくないデータによって、こういう顔のこういう形のものであるというイメージが出てくる。これが、想である。

そして、行。これは、意志である。つまり、いついつまでに何々を達成するだとか、あるいは、これをこのような形で動かすぞといったような意気込み、これが意志である。

そして、最後の意識。これは、瞑想を深くやっていればよく経験することだが、わたしたちの肉体の構成部分は意識で形成されていると。つまり、データの集ま

り、データの塊、塊だね、これが意識である。

これ以上の要素は存在しないし、またこれ以下の要素も存在しない。

そして、この五蘊を完璧に浄化し尽くすこと。そして、それを最終的には光に変えてしまい、そのいろんなエレメントの光を一つの光へと変換させ、そして大いなる広がりと、大いなる深みをつくり上げること。これが、オウム真理教で説くマハー・ニルヴァーナへ至る道である。

◉最終地点までの途上には

当然、その途中の段階で、形ある美しい世界への没入、あるいは神秘的力の獲得、あるいは身体が神々に変化するといったいろいろな体験、およびいろいろな心の状態を経験する。

例えば、わたしたちが死を経験し、その死の中でまた死を経験するといったような教え、これは、最終地点に到達すれば生と死というものはすべて見えるわけだが、この二重の死、三重の死の表現は、皆さんもよく知っている『滅亡の日』

(オウム出版)、あるいはキリスト教の「ヨハネの黙示録」ね、こういうものにうたわれている。つまり、仏教観と、この例えば「ヨハネの黙示録」とは、相反するものではなく、仏教的修行の途上の一部分にすぎないということになる。

あるいは、ヨーガ的なものの考え方で、創造・維持・破壊といわれるもの、これも同じで、これは、この欲界、あるいは色界、つまり形状の世界、美しい形の世界、この世界が創造され、維持され、破壊されるというものすべてを経験していれば、これもまた真理の流れの一つであるということに気づくであろう。

そして、当然その世界の神々の中には、アラーの神も登場すれば、あるいはヤハーの神も登場すると。あるいは、ヴィシュヌ神も登場すれば、シヴァ大神も登場するという形になる。あるいは、この欲界や色界へ存在している無数の仏陀、この無数の仏陀も登場することになると。そして、これらの形状の持ち主、魂は、すべて真理に到達するための一つのポイントにすぎない。というと、シヴァ大神も一つのポイントかということになる。

シヴァ大神には、無数の、法身(ほっしん)、報身(ほうしん)、変化身(へんげしん)、本性身(ほんしょうしん)、金剛身(こんごうしん)といった、

この欲界、色界、無色界、あるいはマハー・ニルヴァーナに至る世界において、無数の形ある現われがあります。よって、途上であるともいえるし、最終地点でもあるということだね。

そして、それは何を隠そう、あなた方が修行し、四つの預流支を実践することによって、変化していく過程であるともいえます。つまり、あなた方の最終地点にあるもの、あなた方の最も奥にある如来像、あるいは仏性といわれてるもの、ここへ到達する途上のいろいろな形、あるいはいろいろな五蘊の現われ、これが神々であり、あるいは菩薩であり、あるいは仏陀であり、あるいはシヴァ大神の法身、報身、変化身、本性身、金剛身であるといえるわけです。

◉三宝帰依、その本質は一つ

そして、そのための実践は何かというと、それは四つの預流支です。では、なぜ四つの預流支なのかと。

まず、四つの預流支の第一は、如来に対する帰依、仏陀に対する帰依、あるい

はグルに対する帰依を説きます。これは何を表わしているかというと、わたしたちのまず最終地点に対する、ね、つまりあなた方の心の到達しなければならない、最終地点に対する帰依をしなさいよと。あなた方は、現実の生活によって、いろいろなものを見えなくされ、聞こえなくされていると。

だから、既にそれを体現したものに対して帰依をすることにより、あなた方の本質、心の本性とそれをダブらせ、帰依をしなさいよと。これが、第一の帰依であると。

次は、第二の帰依、真理に対する帰依であると。この真理に対する帰依とは何かというと、あなた方がその地点へ到達するためには、多くの教え、多くの実践が必要ですと。その多くの教え、多くの実践を説き明かしたもの、これを真理といいます。もちろん、この教え、この実践をなすことにより、先程述べた如来の本性へと到達します。そして、それはイコール、シヴァ大神ということになります。

よって、この第二番目の真理に対する帰依というものは、あなた方を最終地点

へ導く乗り物に対する帰依ということになるでしょう。

では、第三番目のサンガに対する帰依。これは、漢語でね、僧伽と訳されまして、この僧伽の僧を採って、仏・法・僧の僧となりましたと。実際は、だから正しくない。実際は、サンガというべきです。サンガというのは何かというと、真理を実践している者、真理を実践している人たちの集まりに対する帰依ということになります。

この意味は、ちょうど如来の本性を最終地点だとするならば、その途中の、ね、多くの駅、つまり、あなた方の今の出発点から、多くの段階がそこで存在するわけだけど、その実践途上の人たちが経験している、つまりあなた方の目的地に至る途上に対する帰依ということができます。

つまり、三宝帰依とは何かというと、本質は一つであると。

それは、如来の本性に対する、あるいはシヴァ大神に対する帰依であると。

そして、そこへ到達する乗り物という真理、あるいはそこへ到達しようとしている多くのポイントを、今ね、実践している人たちに対する帰依を培うことによ

り、今から如来の本性へ到達するまでの道を一本化すると。

そして、目先を固めることにより、どんなに遠い道のりでも必ず到達するのと同じように、目先を固めることにより、必ずその本性へと到達しますよという教え、これが仏教であり、真理です。

そして、第一の預流支は、この三宝に対する帰依です。

◉学び、考え、実践する

そして、この三宝に対する帰依をなしたならば、次はどのように学び、どのように考え、どのように実践するかということが、四つの預流支の残り三つということになります。

まず、どのように何を学ぶのかと。これについては、皆さんもよく知っているとおり、仏典、仏典を基に説かれた教え、あるいはそれを現代版に変えられたグルの教え、これを聴き、読み、ね、これが二番目であると。

なぜ、ここで聴き、読みで止めるのかというと、多くの教義を聴き、読まない

と、自己の生まれてから今までの観念、つまり三悪趣へ至るための観念によって法をねじ曲げてしまいます。よって、まずはデータの入れ替えという意味において、グルの教え、あるいは経典の教えというものを何度も何度も聴く必要があります。

よくね、優秀な人で過ちが多い。それは、パッと記憶してしまうから、もうそれを、いかにも自分のものになったという錯覚を起こすわけだね。ところが、実際深い意識というのは、もう小さいときから、テレビ、雑誌、新聞、あるいは友人関係等で大量のデータを入れていますから、心の奥底のデータというものは濁っていると。

そして、それと同じレベルで、一回教義を聴き、あるいは教義を読んだだけでは、あまり意味をなさないんだと。何度も何度も読み、聴くと。それで、データを入れ替えると。

次に、第三番目の預流支。これは、そのデータを聴き、あるいは読み、それに基づいて考えると。この考えるとは何かというと、例えば自己の苦しみについて

考えると。あるいは、周りの苦しみについて考えると。

よく皆さんは、こういう質問をわたしにします。「周りが理解しないんだけど、どうしたらいいでしょうか」と。しかし、わたしが思うには、周りが理解しないのではなく、あなた方にまだ教義が入っていないんだと。つまり、一番目の説法を聴き、それから読むという段階が少ないがために、周りの言葉、あるいは感情に翻弄されてしまうと。

本来、凡夫、あるいは真理に到達できない外道というものは、哀れむべき存在である。なぜならば、心の本性へ到達できないからである。そこを考え、しっかりと押さえ、そして真理を学び、次に考えると。そして、諸現象について考えるならば、すべての苦しみは必ず解決できる問題であると。解決できない問題は、この世に存在しないんだということが理解できるでしょう。

そして第四番目、その法の実践を行なうと。

ということは、この四つの預流支というものは、まず自己の道筋を第一の預流支で決めると。そして、第二の預流支で学び、第三の預流支でその道筋に沿って

考え、第四番目の預流支によって実践すると。

ということは、あなた方の五蘊は、この人間に生まれ、今まで三悪趣のデータがたくさん詰まっていたこの五蘊は、徐々に徐々に変化し、そして人間へと変化し、憤怒天へと変化し、戯忘天へと変化し、そして色界の天界へと変化し、無色界の天界へと変化し、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと到達するということになるわけです。

◉残された日々をどう生きるか

仏典も、前期仏典では、あまり神変（しんぺん）、つまり神通が著わされていません。しかし、後期仏典においては、多くの神変、つまり神通が著わされています。

これは何かというと、例えば一年修行した人と、三年修行した人、あるいは五年修行した人、あるいは七十年修行した人とでは、ね、これは五蘊の形成している要素が全く違います。例えば、煩悩ゼロで、神々の言葉を語り、神々の心を持ち、あるいは神々の行為をなす者、この者の周りは、当然光に満つるでしょうし、

多くの神変を現わすこととなるはずです。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けらんない。どんなに人間が頑張ったとしても、人生はわずか八十年である。この八十年の人生を、既にわたしたちは二十年、三十年、四十年とつぶしている。残りの六十年、五十年、四十年をどう生きるか、ね。そして、三悪趣へ転生するのか、あるいは、人間、憤怒天、戯忘天といった高い世界へ転生し、楽を長い間にわたって享受するのか、これはあなた方が選択する道だといえるでしょう。

もう一つ別の比喩を使うならば、ちょうどあなた方が欲界のバルドーに入ったとき、つまりもうかなり後半だね、夜摩神が登場します。そして、夜摩の神々はあなた方を裁くわけだけど、そこで、ね、白い石と黒い石を用意し、そして、それを秤にかけます。それは、あなた方の善業と悪業を量る段階です。

これを考えると、おかしいなと考えるかもしれない。しかし、ちっともおかしくない。なぜならば、わたしたちの五蘊というものは、先程も述べたとおり、悪業と善業の集積だからであると。この悪業と善業の集積ということは、あなた方

の死後、地元素から空元素の分解に至る過程において、すべていったんアーカシック・レコード、コーザルの世界へと還元されます。そして、そのデータによって裁かれるわけです。

よって、真剣に正しく生きることこそ、皆さんにとって最も得な生き方といわざるを得ません。

一九九一年一月十二日　横浜支部にて

◆第十話　光に満ちた未来を

「四預流支の実践」

◉日々の蓄積によって

人間の寿命は、どんなに頑張ったとしても百歳を超えることはなかなか難しい。この百歳の寿命は、それを歩く前に百年間のことを考えると、大変長いように感じることができる。しかし、百年間を振り返ってみると、決して長くは感じないであろう。これは、例えば、今六十代を歩いている人、あるいは七十代を歩いている人も、それは同感できる考えではないかと思います。

この短い人生の中に多くの経験をし、そしてその多くの経験は、わたしたちを地獄、動物、餓鬼といった悪趣の世界へと転生させるか、あるいは人間、阿修羅、

天界、梵天界といった高い世界へと転生させるのか、その分かれ道は特別な作業を行なうのではなく、日々の身の行ない、口の行ない、そして心の行ないの総合、蓄積によってすべては決まるんだということは、皆さんもよく知っているはずである。

これはちょうど、日々お金を少しずつ蓄えて、気づいたときには大金持ちになったという例と大変似ている。もちろん、一獲千金の特別なものがないわけではない。それは、例えば現代でも多くの博打（ばくち）、例えば競輪や競馬あるいはボートといったようなもの。で、その博打によって、大金を当てた人、これも若干はいるかもしれない。しかし、それは、この日本の人口、一億一千万の中のほんの一かけらであるとしかいわざるを得ない。

これと同じように、特別な技法によって瞬間的に意識を移し変える、これは大変難しい作業である。この難しい作業のテクニックは、皆さんにイニシエーションという形で伝授されているはずである。ところが、おそらく皆さんは、そういうイニシエーションの類いを、自己の実践をしなければならない課題として見つ

めるのではなく、一種のイベントとして捉え、そしてお祭的にそれを消化しようとしているのではないだろうか。

◉五蘊を神々へ

わたしたちの経験は、梅とそれから漬けられるものの関係と大変よく似ている。ここに、青梅があると考えてほしい。この青梅を、例えばアルコールの中に漬けると。例えば、しそと塩の混じったものの中に漬けるとしましょう。一日、二日と漬けていけば漬けていくほど、この青梅は酒漬けの場合、どんどんどんどん酒に浸り、しそ漬けの場合、どんどんその赤みを増すということになるでしょう。

これと同じように、わたしたちが日々、例えば身の行ないにおいて、殺生しない、偸盗しない、あるいは愛のないセックスをしないという実践をするならば、あるいは口の行ないにおいて、嘘をつかない、必要のない言葉をしゃべらない、悪口をしゃべらない、人と人とを仲たがいさせるような言葉をしゃべらないという実践をするならば、あるいは心において貪りを離れ、嫌悪を離れ、そして真理

を否定せず、真理のデータを入れるという実践を繰り返すならば、ちょうどそれは青梅が酒に漬けられ、少しずつ少しずつその青梅の中に酒を浸透させるのと同じように、あなた方の五蘊は、少しずつ少しずつ神々に向かって変化していくはずである。

ところが、あなた方が、例えば自己を保全するために、殺生をなし、偸盗をなし、あるいは愛のないセックスをなし、あるいは酒やタバコにうつつを抜かすと。あるいは、口の行ないについて、嘘を平気でつき、必要のない言葉を語り、悪口をしゃべり、人と人とを仲たがいさせるような言葉を平気で語ると。あるいは、心の働きによって、貪りを肯定し、嫌悪を肯定し、そして真理でないものを肯定するといったような生き方をするならば、ちょうどそれは、しその赤みが梅にどんどん浸透していくように、あなた方の五蘊は三悪趣へと向かうはずである。

◉悪趣を脱出し、善趣へ

では、あなた方が人間、憤怒天、天界、あるいはそれ以上へ生まれ変わるために、いったい何を日々行なえばいいのかと。それは、もう皆さんもよく知ってのとおり、四つの預流支である。

この四つの預流支というのは、まず第一は三宝に対する帰依である。それは、あなた方の心の本質に到達する、本質と同等であるグルに対して帰依をすること。そのグルに対して布施や奉仕の実践を行なうこと。

あるいは、グルの説く法、真理に対して、あるいは昔から真理といわれているものに対して、しっかりそれらを学び、広めるという帰依の実践を行なうこと。これが第二である。

あるいは、その真理を実践している教団に対して、布施を行なうこと、奉仕を行なうこと。その教えを奉じ、実践すること。これが第三であると。

これを三つまとめて、第一の預流支といいます。

そして、第二の預流支は何かというと、この二番目、あるいは一番、三番の口

から出た教え、これらのものに対してしっかりと学び、研究し、記憶すると。これが、第二番目の預流支です。

そして、第三番目は、その学び、研究したものをもとに自分の人生に当てはめ考えると。そして、深く熟考すると。これが、第三番目の預流支です。

そして、第四番目の預流支は、この考えたことを実際に具体的に実践すると。これが、第四番目の預流支です。

そして、皆さんがこの一番から四番目の実践を行ない、十の戒めを守り、実践することにより、皆さんのこの形ある肉体、あるいは感覚、イメージ、意志、意識という五つの集まりは、必ずや酒が梅に浸透するのと同じように、あなた方の五蘊に浸透し、五蘊が変わり、悪趣を脱出し、善趣へと生まれ変わるでしょう。

在家の修行のポイントは布施、持戒であるといわれています。三宝に対して布施をし、持戒を守らない場合、人間界からだいたい阿修羅の世界へ生まれ変わるといわれています。真剣に布施をなし、そして戒律を守った場合、その魂は戯忘天界へ生まれ変わるといわれています。

今まで積んだあなた方の悪業は、いくら後悔しても仕方のないこと。それは、しっかりとザンゲし、落とし、これからあなた方がしっかりと功徳を積み、実践するならば、必ずやあなた方の未来は光に満ちたものとなるでしょう。

はい、それではね、しっかりと修行に励んでください。

一九九一年一月十三日　福岡支部にて

◆第十一話　意識の変化と強い意志を

「広大な真理の光のために」

◉修習と成就

バケツに透明な水を入れる。そして、その透明な水に墨汁を一滴、二滴、三滴と落としていく。いったい、これはどうなっていくだろうか。この水の色は、薄い黒から徐々に徐々に濃い黒へと至っていく。

逆に、ここに透明な水があり、その透明な水がバケツに入っていると。この透明な水に牛乳を一滴、二滴、三滴と入れていくと。いったい、これはどうなるだろうかと。薄い白から、徐々に徐々に濃い白へと移行していく。

そして、これが修習であり、成就なのである。

もし、わたしたちが、悪法を日々の糧とし、食らい、生活するならば、それはちょうど墨汁が透明な水に溶け込んでいくのと同じように、少しずつ少しずつその黒味を増し、そして気づいたときには、墨汁とほとんど変わらないぐらいの濃度の黒い色を呈している。

逆に、わたしたちが、善法を牛乳と同じように一滴、二滴、三滴、つまり一回、二回、三回と修習を続けていくうちに、バケツの水は、徐々に徐々に牛乳と同じぐらい濃い白を呈するのと同じように、わたしたちの心も善法に完全に浸されることになる。

◉悪法を取り除くには

では、この悪法は、どのようにしたら取り除くことができるのだろうかと。それは、濾過する以外に方法がない。しかも、その濾過する方法は、水分子を通し、それでいて墨汁の分子を通さないと。このようなものが存在し、そしてそれによって漉すことができるならば、また元の透明な水と、そして墨汁とに分かれること

ができるだろう。

つまり、純粋な心と、そして悪業とに分離できるはずである。この濾過紙とは何かというと、これはわたしたちの微細な意識状態におけるザンゲであり、そして透明な水は、わたしたちの純粋な心を表わしている。もちろん、墨汁は悪業を表わしていることはいうまでもない。

この状態で、つまり透明な状態で、わたしたちが白い水になっていくこと。つまり、善法を何度も何度も繰り返し修行すること。これによってのみ、わたしたちは、純粋に白、純粋に功徳の状態を顕現化することができるのである。

では、いったい悪法とはいかなるものがあるのだろうかと。それは、わたしたちの煩悩を増大させるものである。では、なぜ煩悩を増大させてはならないのだろうかと。

これは、わたしたちが、もし煩悩を増大させ、その煩悩に限りがあるならば、それは増大させたとしても、わたしたちに苦しみというものは生起しないはずである。しかし、煩悩には際限がない。そして、その際限ない煩悩なるがゆえに、

わたしたちは苦しまなければならない。よって、煩悩を増大させるようなすべての行為、すべての言葉、そしてすべての心の働きを止滅するべきなのである。

では、善法とは何であろうか。これは、煩悩を弱め、少なくし、そして最終的には滅尽すると。そして、心を広大に、無辺に、そして深遠に、上と下のないぐらいの大きな心をつくり上げていくこと、これが最高の善法である。

◉苦しみの因——五蘊における修習

では、煩悩を増大させるものには、いったい何があるのだろうか。それは、五蘊における修習である。五蘊における修習とは何であろうかと。

まず、我が身我なりと。この肉体を我と感じ、そして、その肉体に多大な期待と多大な投資を行なうと。これが、まず第一に、わたしたちがなしてはならないことである。なぜならば、この色、肉体というものは、無常を根本とし、この無常を根本とするということは、わたしたちがそれにとらわれればとらわれるほど、この肉体が止滅するときに大きな苦しみを味わわなければならないからである。

では、第二の悪魔、第二の悪法とは何であろうかと。これは、感覚を増大させることである。

例えば、わたしたちが美しさに対して執着するならば、その反対の嫌悪も当然増大する。例えば、わたしたちが快楽に対して心を向けるなら、当然その反対側の苦痛というものにも敏感になり、苦しまなければならない。例えば、わたしたちが素晴らしい音に対して執着をするならば、わたしたちの心を乱す音に対して、当然苦しまなければならない。

このような形で感覚を増大させること、イコール苦しみなのである。よって、仏教やヨーガの修行においては、制感、つまり感覚を制するプラティヤハラをね、最もいいステージの一つと、素晴らしいステージの一つに数え上げているわけである。

◉五蘊の統御を

では、イメージについては、いったい何がいえるだろうかと。

このイメージは、わたしたちに肉体的悪業を積ませないで、いろんな経験をさせてくれる。例えば暴力のシーン、例えばセックスのシーン、例えばグルメのシーンと。これは、目で見る喜びという形で、この現代の日本では大いに称賛をされている。

しかし、このけがれなるがゆえに、わたしたちは、心の傾向というものを一つの方向に向けられてしまう。それはちょうど、動物における学習と同じである。この動物における学習とは何かというと、ここに犬を用意してね、その犬に食事を出すと。そのとき、必ずベルを鳴らすと。しまいには、食事を出さなくても、ベルを鳴らすだけでよだれが出てくると。

これと同じように、例えば異性を見たら、心をお互いに磨き上げる対象として見るのではなく、性的な対象としか見れなくなると。例えば、お金イコール美しい衣服を買う、あるいはおいしい食べ物を食べるといったパターン化された心しか持てなくなってしまうと。これは、表象のけがれなるがゆえに起きる現象である。よって、表象については十分に注意しなければならない。

では、四番目の行、意志はどうであろうか。この意志は、一見わたしたちを幸福にしてくれる。なぜならば、ものを達成するとき、そこには当然その人の願望というものが存在しているし、その願望を満足させることは、当然大きな利益をその人に一見与えるかのように見える。しかし、この意志も結局カルマの制約を受けているわけである。

よって、達成できること、あるいは達成できないことという二つの面が出てくる。達成できる面については、この意志は、先程も述べた大変幸福をもたらせてくれるが、達成できないことに関しては大いなる苦しみを与えてくれる。よって、行蘊、つまり意志から離れるべきなのである。

では、最後の意識、データはどうであろうかと。このデータは、一見、白でも黒でもない。しかし、このデータが、例えば意志と結びつき、例えば表象と結びつき、例えば感覚と結びつくことによって、あるいは肉体と結びつくことによって、多くの苦しみを生起させるわけである。

例えば、例を挙げるならば、決めたことを実行できないとき、それは挫折感で

あると。その挫折感は、苦しみの原因であるという教えがあったとしよう。このデータのみでは、わたしたちに、苦しみもあるいは楽しみも与えてくれない。しかし、このデータが強く根づいていると、例えば、何かを達成しなければならないとき、それができなかったときの苦しみといったら、それはもう想像を絶する苦しみである。

あるいは、Aという感覚は、大変わたしたちに素晴らしいフィーリングを与えてくれると。例えば、そういうデータがあったとして、そのデータをもとにそれを実践すると。ところが、それが得られなかったとき、それは、やはり心は大変大きな失望を味わうことになる。よって、この意識も統御する必要があるわけである。

◉オウム真理教の考え方——現世を超えた価値観をもとに

ところが、巷の宗教や、あるいはものの考え方は、この現世をいかに楽しく生きるか、いかに楽に生きるかの法が説かれている。

もちろん、オウム真理教においても、現世の幸福というものに対するアプローチは当然行なっている。しかし、それは原則として、仏陀釈迦牟尼の素晴らしい法、あるいはインド聖者の説いてきた素晴らしい法、あるいはわたし自体が体験した素晴らしい法がベースにあり、そのベースをもとに展開されているわけである。

よって、現世だけではなく、もう一つの、現世を超えた世界の価値観をもとに現世を分析しているから、例えば現世に対して成功したとしても、そこで没入することはないはずである。

ところが、一般はそうではないと。そして、仮にその宗教により恩恵を受けようものなら、それは大変な縁をつくってしまう。そして、大変な縁をつくるがゆえに、そこから苦しみが増大する。苦しみが増大するがゆえに、その人は、よりいっそう大きな不幸をしょわなければならなくなる。

例えば、例を挙げよう。あまり努力をしないで大学受験に合格したと。これは、これこれ宗教のお蔭であると。しかし、わたしはそこで問いたい。でも、あなた

の目的は大学なのかと。結局、大学に入れば、また多くの試験があり、そして卒業後、社会に通用するようなやはり知識が必要である。しかし、そこまで考えているわけではない。ポイント、ポイントを通過すればいいんだという、日和見的なね、思考がそこにはあると。

オウム真理教の教えはそうではなく、きちんと土台を固め、そして功徳を積み、思索力を増すと。ということは、例えば、そこで仮に徳によって合格したと――努力をしないで――としても、その人の智性は修行し続ける限り増大するわけだから、アフターケアについても十分目的を達成することができるであろう。

そして、これから先の世の中は、もっともっと大きな揺れが起きてくるだろう。その大きな揺れが起きたとき、不動心を持ち、真理の実践ができるかどうか、そして自分自身を見失わないでいられるかどうかということは、これもすべて日々の皆さんの修行の結果といわざるを得ない。

◉絶対的な自由・幸福・歓喜への法

では、いったい何をなせば、わたしたちは絶対的な自由・幸福・歓喜を味わい、そしてこの現世において楽を享受し、来世において安定を得、苦を完全に離脱することができるのであろうかと。それは、四つの預流支なのである。

つまり、しっかりとした設計図、図面ね、未来における図面、あるいは今生における図面を与えてくれる三宝に対して、信を持ち帰依をすることと。ここでいう三宝とは、オウム真理教では、シヴァ大神の化身である、あるいは諸々の仏陀の化生身である、グルと。第二番目は、その真理と、その法。そして第三番目は、その法に集っている者に対して、信や帰依を持つことである。

第二番目、これは記憶修習である。つまり、何を考えどうするのかということを、今まで自分自身で培ってきた考えにとらわれるのではなく、教義にのっとり考えることであると。そのためには、正記憶修習、つまり経典を何度も何度も読み、記憶することが必要である。この段階では、決して自分の考え方を入れてはならない。自分の考え方を入れれば、必ず心に乱れというものが生じるからであ

る。

第三番目、これは、その真理のデータにのっとり考えることである。それは自己の苦しみについて考える、あるいは自己の行為について考える、自己の言葉について考える、自己の心について考える、あるいは周りの人の苦しみや、周りの人の痛みについて考えると。これが、第三番目の預流支である。

そして、第四番目の預流支は、それに基づき実践するということである。今までなしてきた、例えば黒法、つまり悪法については、きちんとそれをシャットアウトし、そして善法に切り替えていく作業、自分自身の身・口・意を完全にこの悪趣のデータから人間に移し替え、人間から天界へと移し替えていく作業、これが四番目の実践なのである。

◉五蘊を浄化するためのアプローチ

実は、オウム真理教には、真理学園という考え方があります。そして、信徒の皆さんには、いったんこの考え方は消えたかのように見えているかもしれないけ

ども、オウム真理教の研究スタッフは着々とその研究を進め、例えば数学においては、まず代数と幾何に分け、その代数の部分は約二時間で一年間で通過できるというね、六百九十数時間で通過できるようなプログラムを今作っています。そして、これは、小学校から高校までの全体系の代数、つまり数を知らない子が、微分・積分を解けるようなレベルになるまでのプログラムを作っていると。

これも、先程述べた、要するに子供たちを楽にしたいと。つまり、不要なことを一切省き、そして楽々この現世の問題点を解決させていきたいと考える、現世の幸福に対するアプローチの一つです。

あるいは、先程述べた、表象、イメージのけがれに対して対抗するために、映画のカメラを買い、そしてアニメチームを作り、もう実際には七分三十秒のアニメーションができあがり、次には「超越神力パート1　天耳通（てんにつう）」という、これはなかなか面白い内容だけども、このセル画もほとんどできあがり、おそらく三月中にはね、この二本とも皆さんの前に見せることができるんじゃないかと思います。

あるいは、皆さんにもっと視覚、聴覚、嗅覚、これを使って、実際の死、あるいは死の世界というものを経験していただくために、「死と転生」という、これはオペレッタ、つまり音楽、そして舞踏、そして詞章、マントラ等をね、使った、これは広大なイニシエーションなんだけども、これを大阪を皮切りに、全国でまず五カ所やりたいと考えてます。

これらのことはすべて、五蘊を悪法から離脱させ、善法に切り返させるための手段である。もちろん、これは一つ一つのイベント、内容を見ていただいたらわかるとおり、すべて皆さんの納得できるようなね、ものとして提供することができるようになると思います。それは、これらすべてを使い、皆さんの魂を浄化し、向上させたいと考えているからです。

もう少し、ちょっと立ち入った話をするならば、オウム真理教の内部には、ＡＦＩ、アストラル・フード・インスティテュートというのがあります。で、これによって、例えば乳酸菌を使った豆腐の開発だとかね、あるいは、そうだね、きな粉を使ったようかんだとか、あるいはオウム食をドライにするだとかね。ある

いは、豆乳を完全にイニシエーション化してしまうだとか、そういう研究も進み、これもたぶん三月中には、形になるんじゃないかと考えています。

こういう研究、これは、もちろん味覚を使い、皆さんの五蘊を浄化しようと考えているわけだけど、こういう研究を進めていくためには、皆さんのね、やはり協力と、そして意識の変化が必要です。そして、強い意志が必要です。

◉多くの魂をマハー・ニルヴァーナへ

では、いったいどういう意識の変化と強い意志が必要なのかと。

まず、意識の変化については、自分自身の問題点をもっと科学的に考え、そしてこういう問題点をどう解決したらいいのかというサットヴァのね、やはり心を絶えず持ち続けるということ。そして、他の宗教とオウム真理教とを比較し、いかにオウム真理教が純粋で、真面目で、科学的に法を実践しているかということをね、何度も何度も認識し、修習を繰り返すということ。その皆さんの帰依の心が、必ずやこの世の中の悪法をね、止滅する方向に向かうはずです。

また、強い意志が必要とは何かというと、今皆さんの周りにいる、悪法によって苦しんでいらっしゃる方々を、何としてでも救済しなければならないと。自分は、今生のガティーカーラであると、ね。自分は必ず今生、在家において、色界の四禅定の第一禅定、第二禅定を経験するぞと。最高のエクスタシーを経験するぞと、ね。そう考え、日々の生活を行なうこと。

これらのことをね、実践なされば、真理の光は広大となり、強くなり、そして、この日本を、そして地球を、そして太陽系を、宇宙全体を照らし出し、無明の闇をはらい、多くの魂をマハー・ニルヴァーナへと導くことができるようになるはずです。しっかりと頑張っていただきたいと思います。

一九九一年二月二十八日　新東京本部にて

◆第十二話　真理勝者の道を歩め！

「絶対的な平安の境地へ」

◉三つの道

わたしたちには三つの道がある。その第一の道は、奉仕の道である。そして、第二の道は行の道である。第三の道は、記憶修習の道である。

この第一の道は、わたしたちを戯忘天の世界へと導く。第二の道は、わたしたちを憤怒天の世界へと導く。第三の道は、わたしたちを神聖天、そしてニルヴァーナ、マハー・ニルヴァーナへと導くと。

そして、これは前生のカルマによって、この、どの気道、どの道をたどるかということは大変難しいし、経験もどの経験をしているのかを、その人個人が判定

することは大変難しい。

この左の気道は左道に通じ、右の気道は右道に通じ、そして中央の道は中道に通じている。

ここで一つ、君たちは「おや」と考えるかもしれない。それは何かというと、左道の道は戯忘天の世界かと。そして、戯忘天のこの左の気道はどうなっているかというと、左の気道を通り、そして中央管を通って下に落ちると。ということは、この左の気道の修行をした場合、結局、神聖天、そして光音天、最終的に色究竟天を通り抜けて、空無辺、識別無辺、無所有境、それから非認知非非認知境、そして経験の止滅といったプロセスをたどれないことになる。

もちろん、右の気道も同じである。右の気道の場合、上昇した気道は、まずこの、そうだね、ちょうど頭の角から、やはり同じように目を通って中央管に落ちていく。これも、この憤怒天からなかなか神聖天にはジャンプしづらいことを表わしている。よって、人間界のこの世界が修行の場であり、ここからジャンプすることによって神聖天をぶち抜き、解脱できるんだと仏教では説くわけである。

そして、この左の道、あるいは右の道の経験なくして中央の道に入る方法、それがサキャ神賢が二千五百年前にお説きになった、記憶修習を土台とする五つの潜在的力であり、あるいは五つの能力であり、あるいは四つの記憶修習述であり、あるいは七つの覚醒部分であり、あるいは八つの実践の段階であるといえる。

そして、それらを通過した者が、四つの如意を具足することによってすべてを自在に生きると。これが、サキャ神賢のお説きになった法の初めであり、終わりであると。

◉四つの修行の集積

では、大乗の道はどうかというと、別に特別な修行をする必要はない。ただ生きていればいいんだと、こういう考えがある。すると、君たちはこう考えるだろう。「えっ、ただ生きていればいいのか。そりゃ楽だ。じゃ、みんながいずれ解脱するんだ」と。そういう意味ではない。今経験しているのはすべての過去の果報であって、それを放っておき、ただ真理にのっとり考える。これだけを行なえ

ばいいんだと。あとは普通に生きていればいいんだと。

そうするとどうなるかというと、徐々に言葉が統御されると。そして、行為も統御されていくと。「おやおや、ちょっと待てよ。ということは、大乗でいっている道というのは、聖なる八支の実践過程の、正見解から始まり、正行為、そして正生活を指しているんじゃないか」と。そのとおりである。これが大乗である。

では、タントラ・ヴァジラヤーナとは、これは何であろうかと。これは、意図的に、例えば神聖天の神々を観想し、その要素を分析し、その要素を思索し続け、データの入れ替えを行なう。あるいは、その神々の唱えるマントラ、行為というものをイメージし、その神々のマントラ、行為を自分に移し替えることによって自分の心を変えていくと。これが、タントラ・ヴァジラヤーナの秘法である。

では、オウム真理教で今最高の教えとされている、マハー・アヌルッタラ・ウッタマ・サティアン・サッチャ・パンニャ・ヤーナ。この教えとは何かというと、すべてのまず善の集積を行なうと。そして、すべての徳の集積を行なうと。そして、すべての寂止の集積を行なうと。そして、すべての神々の集積を行なうと。

つまり、このダルマの中には、タントラ・ヴァジラヤーナが内在されているし、マハーヤーナが内在されているし、そしてヒナヤーナが内在されているわけである。そして、それを二十四時間繰り返すことによって、自分自身の五蘊を徐々に徐々にこの人間世界から神々へ移行していくと。

もちろん、タントラ・ヴァジラヤーナの成就者といわれているミラレパ、あるいはティローパ、ナローパたちも、このような実践を実際に行なった。

なぜわたしが、タントラ・ヴァジラヤーナと、ね、マハー・アヌッルタラ・ウッタマ・サティアン・サッチャ・パンニャ・ヤーナという、まあ妙な命名をしたかというと、今世界に存在しているどの教えでもないと。つまり、四つの修行、これを完璧にひたすら集積し続けると。そういう意味が込められているわけである。

◉四つの記憶修習述と五蘊無我の同一性

では、この四つの集積、これは何を意味するのかと。実は今日、皆さんにわたしが講話をしたいと考えたのは、わたしたちを形成しているこの五蘊、つまり、

身、受、心、法といわれている五蘊――申し訳ない、これは、身、受、心、法も、それから、色、受、想、行、識も全く同じであるという講話をしたことがあると思うんだけど――。

《四つの記憶修習述と五蘊無我とは同じである。要するに、「形状・容姿・感覚・表象・意志の遂行・識別」で五蘊なのだが、この「形状・容姿」イコール「身」。「感覚」イコール「感覚」。「表象と意志の遂行（心の働きと心に浮いてくるイメージ）」イコール「心」。「識別」イコール「観念（データ）」。だから同じなのである。ただ、「身・感覚・心・観念」ではちょっと分類が雑なのだ。言い方を換えるならば、成分と形態・容器の違いといえよう。四つの容器があり、中に五つの成分が入っているという違いである。》

（『マハーヤーナ』NO41『南伝大蔵経』解説より抜粋）

今回は、色、受、想、行、識にしておこう。形状・容姿、感覚、表象、意志の遂行、識別、この五つ。この五つに、三つの、要するにデータが蓄積されていくと。その三つのデータとは何かというと、まず善行のデータ、善行でもない悪業

でもないデータ、そして悪業のデータと。だよね、これは。そうでしょ。

日々、わたしたちが生きているということは、この形状-容姿、感覚、表象、意志の遂行、そして識別という、この五つに対して、ね、善行のデータ、善行でも悪業でもないデータ、そして悪業のデータというものが蓄積されていくと。そうだよね。

で、この蓄積されていったもの、この一つ一つのデータがたまってくると、凡夫というものは、特に日本人は、いいですか、必ずまず善行のデータから現象化したいと考える。どうかな、これは。

◉喜びだけを求めると

実は、「有能神相応」というのがあってね、この「有能神相応」の中にこういう一説があるんだ。不飲酒天、つまり阿修羅の世界に密儀があるわけだね。つまり秘法、秘密の法があるわけだけど、この秘密の法を有能神が欲しがったと。ちょうどその不飲酒天の王がね、病んでいて、有能神に自分の病気を治してくれと言っ

たと。有能神の王は、
「じゃあ、その秘法を教えてくれるんだったらいいよ」と。
で、サキャ神賢は、この法に対してどう言っていらっしゃるかというと、
「この法をなすがために地獄に落ちなければならないのである」と。
これは、今の日本密教もそうだし、他の呪術的密教もすべてそうです。
　では、なぜ地獄に落ちなければならないんだと。それは、今の日本人が地獄に落ちなければならないのと同じ意味なんだね。なぜだと。どうだ君たち、なぜだと思うか。つまり、その善行の果報である喜び、これを得るために法はあるわけだよね。そうでしょ、一般的には。どうだ。
　そうすると、五蘊の中に、つまり、形状-容姿、感覚、表象、意志の遂行、識別というこの五蘊のデータの中に果たして何が残るだろうかと。どうだ。まず、善業でも悪業でもないものが残ると。あとは悪業のデータしか残らない。だよね。じゃあ、五蘊が悪業しか残らなくなったら、どこの世界へ生まれ変わるだろうか。どうだ。地獄だよね。現代人がまさにそうだよね。選択をして、ひたすら楽しみ

たい、ひたすら喜びたい、これをやっているよね。

そして、日々の生活においては、殺生をなし、偸盗をなし、邪淫をなし、妄語をなし、綺語をなし、悪口をなし、両舌をなし、心には貪、瞋、癡という、ね――これもオウム真理教の言葉でいくならば、愛著、邪悪心、そして迷妄という三つを、ひたすら修習しているわけだよね。どうかな。そうすると、この魂は、必ず、来世地獄に行くよね。どうだ。

◉真理の実践者の歩く道

ところがだ、真理の実践者はそうではない。まず、二正勤二正断によって入れるデータを、初めは悪法、悪行のデータを少なくしていき、捨断すると。だよね。そして次は、善業のデータを多く入れると。だよね。どうだ。そして、日々の生活においては頭陀処に徹すると。でしょ。食事は一食であると。寝るところは畳であると、例えば、ね。あるいは、地べたであると。だよね。

そして、できるだけ苦しみを見つめると。だよね。苦しみを見つめ、苦しみを

五蘊から止滅するがゆえに、来世は地獄はあるかな。ないよね。つまり、善でもない悪でもないものが残れば、それは人間界だと。でしょ。善が残れば、天界だと。でしょ。ということだね。ここまでいいですか。

そして、そういう心の働き、言葉の働き、そして行為をなす人を称賛すれば、おのずと自分の心は、言葉は、行為はそちらに向かう。どうかな。

ところが、逆にそうじゃなくて、徳を使い果たして悪趣へ落ちようとしている人を見てだよ、「あー、うらやましいな」と思ったらどうなるだろう。自分もそちらの方向に向かい、落ちてしまう。どうかな。だから、最高の、ね、そういう意味でいったら、秘法だと考えなければならない、この今日説いた法はね。

◉グルの本当の愛

それからもう一つ、今イニシエーションの数が少ないけど、特に成就のときにわたしがあまりつかなくなったけど、それはなぜだかわかりますか。本来、イニシエーションによって成就させる場合、それはグルが与えた幻影だから、それを

自分自身で絶えず得られるように修習すべきだよね。どうかな。

ところが、わたしがイニシエーションによって引き上げた人ほど揺れが大きいんだよ、その後。そういうデータが出ているんだね。なぜかというと、基本的な修行ができていないと。下向した人たちを見ると、だいたい特別なイニシエーションを行なって、それで落ちていった人が多い。

ということは、本当の愛は、下向させないで一生修行させ、来世高い世界へ生まれ変わらせる。そして、いつの日か完全煩悩破壊をさせることがグルの役割だよね。どうかな。だから、今は自分のエネルギーを強めてイニシエーションを与えない方がいいんだという結論に達してきているんだ。

もちろん、成就というね、その道を極端に短くするイニシエーションはしなくても、若干のイニシエーションを君たちに与えるつもりでいます。お手伝いという意味においてね。ただ、できるだけ自力で頑張ってほしい。わかるよね、言っていることは。

例えばだよ、三年間グルについてクンダリニー・ヨーガの成就をしたとしましょ

う。ところが、その人はそれに対して全く感謝することなく下向し、そして、その後五十年間悪業を積んだとしようじゃないか。もちろん、師になったわけだから、三年間で成就して三年間ぐらいは悪業を積まないだろう。でも、残り四十七年間悪業を積んだとしたら、どうだ君たち、それはグルの意図した方向に五蘊が変化し、そういう道を歩いたことになると思うか、ならないと思うか。わかるよね。

しかし、その代わり、君たちの修行時間をたっぷり取ってあげると。つまり、自力でデータを入れ替えなさいと。そのお手伝いをしましょうと、ね。もちろん、君たちが日ごろ受けている護摩供養も、すべてわたしが修法しています。だから、そのようなものによってエンパワーメントはしますと。あとは自力で頑張りましょうと。例えば、三年で成就しなきゃ、五年でもかかってもいいじゃないかと。自分自身で確定させましょうと。いいね。

◉修行者と凡夫にとっての死の違い

最後に、人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。しかし、死というものは、修行者にとっては最高の喜びである。なぜならば、自分の内側に蓄えた、形状-容姿、感覚、表象、意志の遂行、識別の中にある、善果がね、現象化するときであるからである。

人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ。これは、凡夫にとっては苦痛である。なぜならば、彼らが消耗した善の果報がそこで終わり、そして五蘊に蓄えられた、つまり形状-容姿、感覚、表象、意志の遂行、識別に蓄えられた悪業の果報が現象化するときだからである。修行者は、必ず光に包まれ、高い世界へ転生する。しかし、凡夫は、その瞬間暗闇となり、悪趣へ落ちなければならない。

さあ、わたしの弟子たちよ、しっかりと今日この法をまた境として自己を引き締め、真理勝者の道を歩きなさい。そして、未来際において苦しみを完全に止滅してしまい、喜びだけの蘊になり、その喜びを超越し、絶対的な平安の境地に到達しなさい。いいね。

一九九一年三月二十日　富士山総本部にて

◆第十三話　苦しみの本質を探る

「五つの集積と四つの記憶修習述」

◉五つの集積

わたしたちを構成しているものは、五つの集まりがある。その五つの集まりとは、まず形状-容姿であると。この形状-容姿とは何かというと、わたしたちの身体、あるいは顔立ち等を含む、外的なものである。第二番目は、感覚である。第三番目は、表象、つまりイメージである。第四番目は、意志である。それで、第五番目は、識別である。この形状-容姿、感覚、表象、意志、識別、この五つを五蘊と呼んでいる。

そして、この五蘊の働きによって、わたしたちは苦楽を経験させられている。

別な言い方をするならば、この五蘊の中に、苦楽の源が存在しなければ、いかなる状況であろうとも、わたしたちに苦しみというものは存在しない。

では、それはどういうことだろうかと。例えば、生まれながらにして不具を経験すると。これは、形状-容姿の第一の苦である。いいかな。次に、身体が健康であったにかかわらず、その身体が、例えば老いや、病や、あるいは事故によって不具になる。これが、第二の苦しみである。

次は、感覚である。小さいときからもともとカルマが悪く、貧しい家に育ち、そしてものが食べられない。あるいは衣服にしても、あまりないがゆえに、寒さ暑さを経験しなければならない。これが、感覚における第一の苦しみである。

第二の苦しみは、例えばいきなり殴りつけられることによって痛みを経験させられたり、あるいはいきなり冷たい場所に移動しなければならないことによって寒さを経験したり、あるいは今回のインドのように、暑い場所に移動しなければならないがゆえに暑さを経験するといった、そのものの苦しみである。

そして、第三番目の苦しみは、もともと備わっていた感覚が、例えば病気によっ

てなくなる、例えば視覚がなくなったり、あるいは聴覚がなくなったり、あるいは嗅覚がなくなったりすると。これが、第三の苦しみである。

では、表象についてはどうだろうかと。これは、もともと、例えば暗い家に生存した場合、父母のケンカ、争い、あるいは父母ではなくても、兄弟の争いや、親族の争い等にいつも耳を傾けるがゆえに、イメージとしてそういう暗いイメージしか存在ない。これは、第一の苦しみである。

第二の苦しみは、もともと見たくないものや、聴きたくないもの、それを聴いたがために生起するイメージの苦しみである。

第三の苦しみは、今まで対象に対して、こうあってほしい、あるいはこうだろうなと思っていたものが、壊れ去るときの苦しみである。

では、意志についてはどうであろうか。意志については、まず前生からの引き継ぎによって挫折、挫折することによって卑屈を修習する苦しみが挙げられる。第二は、目標を設定し、その目標が達成できなかったときの苦しみである。そして第三の苦しみは、目標を達成した後もそれを維持しなければならない場合、そ

れを維持することができなくなったときの苦しみである。

では、第五の識別はどうであろうかと。この識別については、例えば美しい醜い、例えば綺麗な声、あるいは綺麗な音、醜い声、醜い音と。あるいは、好きなにおい、嫌いなにおいと。あるいは、好きな味覚、嫌いな味覚と。あるいは、好きなフィーリング、好きな感覚、あるいは嫌いな感覚と。あるいはその法則が、あるいはそこのしきたりがね、好きである、嫌いであると。つまり、この識別の苦しみというのは、もともと二極化しているわけだから、必ず半分は苦しみであるということになる。

これが、わたしたちの五蘊である。ということは、よく検討してみるならば、この五蘊というものは、総じて苦であると。

◉四つの記憶修習述

では、いったい修行者は、この五蘊をどのようにしようとしているのかと。まず、身体に対して、しっかりと記憶修習すると。そして、この肉体が無常を根本

としてできているものであると。この形状-容姿が無常を根本としてできているものであるから、それにとらわれるべきではないと記憶修習すると。これが、第一番目に来るわたしたちの課題である。

次は、第二番目の苦しみ。これは、感覚そのものは苦、楽、不苦不楽という三つの要素があるわけだが、このどれにとらわれたとしても、わたしたちの苦しみというものは増大する。なぜならば、楽という感情の生起が強ければ強いほど、苦という生起の感情は強いんだと。楽という感情の生起が強ければ強いほど、苦という感情の生起は強いんだということがいえる。

よって、第二番目の検討は、この一切の感覚、感覚というものに対してしっかりと検討し、この感覚から離れるということが第二番目の課題になってくる。

第三番目のわたしたちの心を構成しているもの、それはイメージや、あるいは意志といったようなものだがね、このようなイメージや意志といったようなものは、これは無常を根本としている。先程も述べたとおり、例えば特定の対象に対して、こうあってほしい、あるいはこうあるべきだ、あるいはこうだというふう

に断定的にとらえたとしても、相手の心は無常であるから、当然そこには変化が生じる。

よって、三番目の記憶修習述は、心は変化するものである、よってそこには依処は存在しないと。これが、第三番目の記憶修習述である。

次は、第四番目であると。第四番目は、わたしたちが識別をしっかりなさなければならない対象である、法則である。この宇宙の法則そのものは、すべては苦しみを生起させるための法則である。

例えば、例を挙げよう。この地球にしろ、宇宙にしろ、必ず破壊される。よって、この地球や宇宙に執着していることは、いずれ破壊を招くわけだから苦であると。あるいは、それは戯忘の天界にしろ、憤怒の天界にしろ、神聖天界にしろ、同じように破壊される。よって、そこにとらわれることは、やはり苦しみである。

あるいは、妻や子供に対して愛着すること、ね、まあ一般的には、道徳的には、倫理の観点からいくと、それは素晴らしいことになっているが、しかしそれも、例えば子供は巣立ち、例えば妻の心というものは、必ず変化する。これは夫も同

じだと。よって、その法則も苦しみであると。あるいは、父母はどうであろうかと。父母も同じように愛着すればするほど、父母が亡くなったとき大きな苦しみを受けなければならないと。

このような形で、社会的な一つ一つの法則に対して検討を加える。検討を加えることによって、それが苦であり、自己本来のものではないことを理解すると。

◉二正勤二正断

ここまで修行が進んでくると、ではいったい、そういう世界ではない世界へ生まれ変わるためには何を実践したらいいんだということになる。…（略）…それは、善法を増大させ、悪法を減少させることである。

……（途中略）……

そして、これをもって三十七菩提道品（さんじゅうしちぼだいどうぼん）という。

そしてね、最後にちょっと付け加えておきたいのは、消極的実践イコール四つ

の記憶修習述。そして、中程度の積極的実践、イコール二正勤二正断と。それから、積極的確立、これが五つのポテンシャルと五つの力と。それから、覚醒への確定、これが七つの覚醒部分と。衆生と交わり、成就者としてのフォームを形成する、これが聖なる八支の段階、あるいは聖なる十の段階と。完璧なるタントラ、あるいはマハーヤーナの仏陀としてのフォームの完成、イコール四つの如意である。

※これは、一九九一年五月三十一日、インドで行なわれた「七科三十七道品」をテーマにした直弟子用の説法の一部分です。

全体が長いので、ここでは「五蘊無我」に関する部分だけを特に取り上げましたが、全体をご覧になりたい方は、『麻原彰晃の世界ＰＡＲＴ９　尊師、聖地インドを行く』をご参照ください。

◆第十四話　まず、五蘊を証智せよ

「四つの修行により、完全煩悩破壊界へ」

◉とらわれと捨断

わたしたちを構成している愛欲の五つの要素、それは形状-容姿、そして感覚、表象、意志の遂行あるいは経験の構成、そして識別だね。この意志の遂行と経験の構成とは、どう違うのかと。これは同じであると。つまり、経験の構成があって、その経験によってわたしたちは動かされているわけだから、わかるよね、言っていることは。これは、同義語だと考えてください。よって、今日は経験の構成としてここは話させてもらう。

そしてまず、わたしたちがとらわれる第一は、形状-容姿であると。形状-容姿

というのは、例えばスタイルがいい、ハンサムだ、ね、あるいはグラマーであるといったようなものの見方、これが形状-容姿に対するとらわれである。これは第一番目のとらわれである。

しかし、この形状-容姿は、どうかな、無常である。いかにハンサムな人でも、年を取ればハンサムでなくなるし、あるいは、いかにグラマーな人でも、年を取れば身体はたるんでくる。あるいは、いかに筋肉質の人でも、年を取ればやはりたるんでくる。あるいは、いかにスリムであったとしても、年を取れば皺ができると。そうだね、これは。これは現実だよね。

だからまず、第一番目の形状-容姿のとらわれ、これは結果的には無常を根本とする苦であるから、それを捨断した方がよかろうと。どうかな。

では、第二番目の感覚だ。これは君たちも理解できるとおり、例えば麻酔を打つならば、いい感覚もなくなる代わり悪い感覚もなくなる。そうだね。痛みがなくなる代わり気持ち良さもなくなる。そうだね。逆に感覚を鋭くするならば、いい感覚も増大する代わり悪い感覚も増大する。そうだね。

つまり、この苦、楽、不苦不楽の三つの感覚というものは、結果的にはセットでしかわたしたちは感じることができない。よって、これに対してとらわれること、そしてこれを求めることは、そのセット、つまり苦、楽、不苦不楽という三つの感覚を同時に受けなければならないわけだから、やはり捨断する方がよろしいと。

では、三番目の表象、イメージだ。ここで、ちょっと脱線しよう。色でいうならば、黄色、黒というものは、特にこのイメージと関係があると。つまり、宣伝と関係があるわけだね。で、宣伝と関係のある人たちは、いいですか、宣伝によって心の動く人たちは、地獄あるいは餓鬼へ転生する可能性が高いと。そう考えなさい。いいね。意味わかるかな。

つまり、いいですか、この餓鬼の世界は、低位形状界、低位アストラルに中心があるわけでしょ。それから、地獄も中心は低位アストラルにあるわけだよね。そうだね。ということは、この表象、つまりイメージと連動するよね。どうかな。そして、その色彩の、色の中心が黄色と黒であるとするならば、どうだ。それに

反応するということは、その宣伝に反応するということは、当然この世界へ陥りやすいことになるよね。わかるかな、言っていることは。

◉引っかかりと転生

で、まあついでに言うならば、この形状-容姿にひっかかる人、これは戯れ堕落天か、あるいは地獄であると。これは極端だけど、わかるよね、これは。地獄の現われている部分の現実的な痛み、ね、例えば変形することによって、傷ができることによって痛みが起きると、わかるよね。それと同時に、この形状-容姿というのは戯れ堕落天のポイントだよね。美しいもの、綺麗なものを追い求めると。どうかな。

では、感覚に対して同じようにひっかかる魂、これはどこへ転生するのだろうかと、ね。これは、戯れ堕落天とそして人間であると。というのは、戯れ堕落天と人間、この戯れ堕落天と人間のもともと欲求というものは、その美しい対象からいい感覚を味わう、あるいは人間の場合は、単にその触覚的な喜びを求めると

いう意味があるんだね。だから、この感覚、これは人間と戯れ堕落天との関係があると考えるべきである。

では、次に経験の構成、意志の遂行でひっかかる魂、これはどこへ転生するのか。これは、動物と意識堕落天が中心であると。それはなぜかというと、この経験に対するとらわれというのは、例えばある経験があってその経験が一つの結果を出すとするならば、その一つの結果を出す、いいかな、一つの結果を出すその形を自分の中に内在した以上、その他のことをおかすことは危険であると考える魂、つまりその他に対して否定的な意識を生じさせる魂、これはどうだ。意識堕落天だよね。

つまり、自分の専門に対しては大変強いが、それ以外のことを一切シャットアウトし否定すると。これは、意識堕落天の特徴だからね。だから、スペシャリストというのは意識堕落天へ転生する可能性が高いんです。

じゃ、もう一つだよ。ある経験があって、その経験を機械的に、反射的に行なう生き物、これは何だ。動物だよね。わかるよね。ということだよ。

では、識別、この識別を残した場合、どうなるかというと、この識別を残した場合、これは上位形状界へと転生します。他のものを捨断してだよ、経験にもとらわれず、ただいい悪い、善悪という識別、それが実際の行為に至らない場合、それは上位形状界へと転生します。つまり、神聖世界へと転生するということになる。いいかな。

でだ、このつまり表象も、結果的には餓鬼の世界や、あるいは地獄の世界といった世界へ転生するカルマをつくっていくわけだから、結局は捨断しなければならない。そうだね。

では、今言ったとおり、経験の構成、意志の遂行はどうかというと、これも動物界と意識堕落天へ転生するカルマであるから、捨断しなければならないと。そうだね。

では、識別機能だけを残したら、どうなるかと。これは、識別機能だけを残した場合は、要するにこの神聖世界へ至ることはできるわけだけども、その世界からまた識別の力によって下降するよね。どうかな。よって、識別も、これも捨断

しなければならない、ね。

◉五蘊における証智

そのように、捨断しなければならないということを前提に、例えば自分自身の身の行ない、言葉そして心の働きについて、

「これは、形状・容姿に対するとらわれである。」

あるいは、

「これは、表象に対するとらわれである。」

あるいは、

「これは、識別に対するとらわれである。」

ということを日々チェックすること、これが第一番目の証智なんだよ。いいかな。

◉非神秘力・渇愛に対する捨断

そして、この証智をなしたならば、次の段階で捨断しなければならないと。じゃ

あ、何を捨断するんだと。それは、これが現実であるという非神秘力、ね、つまり、例えばわたしたちは生まれて死ぬまでしかないんだと。これは、わたしたちが生まれる前とか死後を知らないから、そういうことが言えるわけだよね。どうかな。わかるよね。つまり、捨断する、捨て断ち、そしてそれよりも高い経験をしなければならない第一条件は、この非神秘力を捨て断つと。

そして、第二は渇愛であると。じゃ、なぜ渇愛なのかと。例えばだよ、君たちは空腹なときとおなかいっぱいのとき、例えば、まあ味が一定だといわれているマクドナルドのビッグ・マックでいいよ。ね、ビッグ・マックを食べたとして、どうだ。あるよな、ビッグ・マックというのは。わたしは、何年も行ったことがないからよく知らないけども、あるよね。そのビッグ・マックの、例えば味が同じだと思うか。違うよね。

つまり、渇愛というのは、対象に対しての認識を誤らせるわけだよ。だから、渇愛を断たなければならないと。つまり、捨断しなければならないものは、この渇愛と、そしてもう一つは非神秘力であると。

◉神秘力・離解脱に対する現証

では、この世でわたしたちが現証しなければならないもの——現証というのは、経験しなければならないものといったらいいね——つまり、この現実的な世界での経験ではなくて、経験しなければならないものは何かというと、それは神秘力とそして離解脱であると。

この神秘力と離解脱であるとは何かというと、まずわたしたちが、例えば神足通を経験することにより、この身体だけがわたしたちの身体ではないんだということがわかるよね。どうかな。よって、この人間の世界だけではなく、つまり他の多くの世界があるんだということを経験させてくれる、まず神足(じんそく)。

次に、この人間の世界だけではなく、神々の世界があり、そこは声によって交信できるんだという天耳。そして、その人たちを司っているものは心であることを理解するための他心。わたしたちの前生を知る力である宿命(しゅくみょう)。

そして、カルマによって、どの世界へ至るかということをしっかりと理解することのできる死生智(ししょうち)。ね、これは北伝では天眼といわれている。まあ天眼で見る

から天眼でもいいわけだけど、実際は死生智。つまり、どこへ死んでどこへ生まれるのかという智慧、ね。

そして、最後は漏尽。つまり、すべてをしっかりと、五蘊形成を含めて知ることのできる、全智となるための漏尽と。

これらの六つの力、六つの神秘力を得ること、これが、わたしたちが今生でなさなければならないことだね。

実は、この餓鬼の定義について、以前からわたしはちょっと疑問があったわけだけども、こういう一節がある。あるサマナが——まあ実は、マハー・ケイマ正大師の未来生において、第一天界の人食い鬼神に生まれ変わるという、わたしは死生智を見たことがあるわけだけど——そこであるサマナが、餓鬼としてペットで飼われていたわけだね。で、なぜそのサマナがケイマ正大師のペットとして飼われるのだろうか、ずっと疑問があったわけだよ。

ところが、今日仏典を研究していると、そこで面白い話があって、餓鬼は人食い鬼神に仕えているんだと。それを見たとき、ははあ、なるほどなと、やはりわ

たしの見ていた死生智は正しかったんだということを確信したわけだね、わたしとしては。よって、君たちに今日、この欲六界についてのより深い部分について少し話をしたわけだけども。

つまり、わたしはいろいろなことを知っているけども、その裏づけがない限り君たちに話さないようにしようと考えています。それは、君たちを惑わしてはならないからね。まあ、それはいいとして。

◉正観・寂止に対する修習

よって、この神秘力と、そしてもう一つ、わたしたちがこの世で達成しなければならないものは離解脱である。つまり、何かというと、いろいろな煩悩から離れることにより、そのグナの干渉を受けなくすると。グナの干渉を受けなくすることにより、逆にこの現象において自在に生きると。この二つが、わたしたちがこの世で達成しなければならない目標であると。

ではだ、そのためには何をなすのかというと、それは正観と寂止であると。正

観とは何かというと、今言ったとおり、いろいろな現象に対して正しく観る、ね、これは正しく観察するだね、正確にいえばね。そして、心が動揺したならば、正しく観察することができないから、心を平静、絶対に動かない状態にする訓練をする。これを修習し続けると。いいかな。

これらの四つ。つまり、五蘊における証智、ね、そして非神秘力・渇愛に対する捨断、そして神秘力・離解脱に対する現証、そして正観・寂止に対する修習と。これらの四つがしっかりとなされるならば、君たちは間違いなく神になり、神を超え、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の偉大なる完全煩悩破壊界、あるいは大完全煩悩破壊界、あるいは大到達真智完全煩悩破壊界へと至ることができるでしょう。

一九九一年十月二十七日　新東京本部にて

◆第十五話　一つ一つを確実にクリアせよ

「十三段階の道と十のきずな」

◉すべての人に解放された教えを有する宗教、オウム真理教

魂にとっての幸い。この幸いというのは、祝福という言葉と全く同義であるわけだけども、この幸いの条件というものが、まさにオウム真理教の説き明かしている修行、あるいは最終的には出家、解脱であること、これがなんと『新約聖書』にうたわれているのである。

もともとわたしたちは、この人間の世界に生まれ出た理由というものは、二つのタイプ、二つのカテゴリーに分類することができる。

その前者は、カルマに翻弄され、そして、ちょうど荒れ狂う川の流れに逆らう

ことができない溺れた者が、その川の流れに押し流されて、大海に出る。そのように、この人間の世界に生まれるパターンと、そしてそうではなく、この人間の生でもう一度、自分自身の心を、そして魂を清め、そこからジャンプし、天の世界へと帰る、あるいは、天を超えて仏陀の境地へと入るためにこの世界を選択する二つのパターンが存在している。

その前者のパターンは、結果的には、この人間の生でよりいっそう煩悩に振り回され、そして落下の道をたどることになる。

後者は、そこで、もし前生において素晴らしい条件設定ができることができるなら、偉大なるグルと巡り合い、そして偉大なる教えと巡り合い、そして偉大なる修行体系と巡り合い、偉大なるイニシエーションと巡り合い、そして、自分の未来の形である、偉大なる成就の形、あるいは成就者と巡り合うことにより、自分の天へ至る道筋を一歩一歩確定させていくのである。

これらの五つの条件を備え、そしてすべての人に解放された各段階の教えを有している宗教、それがオウム真理教なのである。

ところで、オウム真理教の教えの体系というものは、どのようなものであろうかと。

これは、個人の苦しみからの解放、および解脱という小乗。

そして、これは、自己の苦しみの除去だけではなく、自分自身の周りの多くの人たちの苦しみの除去、そして、幸福を植えるという社会的運動や、あるいは個人的な祈り、これを中心としたマハーヤーナ。つまり大乗。

そして、その上に、自分自身の解脱、できるだけ早く、特殊な秘密の瞑想を行なうことによって仏陀の境地へ到達し、そして、仏陀の境地に到達した後に、自分と縁のある、つまり自分でなければ救済することのできない条件の魂を救済するタントラ・ヴァジラヤーナの道。

もう少し高度になると、自己の修行、そして大乗の修行、この二つをミックスし、今生で、あるいはできるだけ近い生で、最終の解脱を達成させようとするテーラヴァーダ。つまり上座部。

これら四乗の教え、四つの乗り物の教え、これがオウム真理教の修行体系であ

る。

◉四乗の教えのターゲット、五つの愛欲の構成要素

では、これら四乗の教えの目的、つまりターゲットは何であろうかと。このターゲットは、わたしたちの五つの愛欲の構成要素であると。

では、五つの愛欲の構成要素とは何であろうかと。

これは、わたしたちが、まず姿形、あるいは顔立ち等にとらわれること。また、それに対する誤った見解と。それをしっかりと正す修行、これが第一であると。

第二は、わたしたちの誤った見解により、感覚というものを正しくとらえることができないがゆえに、逆に苦しみを多くしている、この多くしている感覚の実態を正確にとらえ、そしてそれを止めてしまうという第二の段階。

本来、わたしたちに苦しみ、あるいは楽しみ、その源をつくっているかのように見えるイメージ。しかし、このイメージというものは、対象の正しい認識と全く別に、その情報だけが一人で走ってしまう。そういう危険性を含んでいる、こ

のイメージを完全にクリアにするための第三段階目の修行。

そして、第四番目は、これは白である、これは黒である、これは赤である、これは緑であるといったような、判断。この判断は、言葉を規定する要素となっているわけだが、この言葉を規定する要素である判断を完全に止めてしまい、クリアにし、そして、より本質的なものを見抜く訓練をする第四番目の修行。

そして、わたしたちの経験、例えば、Aという条件のもとではBという方法を行なうことが正しいと。あるいは、Cという条件ではDという手段を講じることが正しいんだと考える。そして行なう。しかし、この経験には、例えば日本、そしてアメリカの交通ルールが全く逆転しているように、例えば、日本は車は左側だけどもアメリカは右側であると。ま、現にアメリカ帰りの日本人が、日本の右側の道路を車で走ったという話を、わたしは何度か聞いたことがある。

これらの、経験の構成に対するとらわれからくる誤った行為、あるいは言葉といったようなものを完全に止め、クリアにし、より深く、一回一回、瞬間瞬間の動作や瞬間瞬間の言葉、あるいは瞬間瞬間の心の働き、これらをより深いものと

して極めていく、経験の構成を止滅する段階と。

これら五つの要素をわたしたちが完全に止めたとき、わたしたちは別のわたしたちへと到達する。そして、この五つを完全に止めたとき、わたしたちは、別の言葉を使うならば、死を経験する。当然、この五つを止める段階において、わたしたちの心は崇高に至ると。

つまり、この人間の世界から離脱し、低い天使の世界から離脱し、高い天使の世界から離脱し、創造主である神の世界から離脱し、神を超えたこの宇宙空間を維持する、あるいは破壊する神々の意識状態を離脱し、そして、心の本質を離脱し、本質的に至福、本質的に幸福、本質的に自由の世界へと到達するのである。

◉いずれ最終地点へ

これらの五つの愛欲の構成要素を止滅する段階で、わたしたちは、十三のタイプの、魂を昇華する、魂を高い世界へ至らせるステージに分類されることになる。

まず、その最もこれから修行しなければならないタイプは、信に基づいて生き

る魂である。

しかし、これら信に基づいて生きる魂も、もし真理の実践を行なっている魂が、我が身に対するとらわれ、あるいは真理に対する疑念の捨断、あるいは、正しくない教えに対する誓いや、あるいは宣誓といったようなもの、あるいは戒律といったようなもの、このようなものを捨断することができるならば、彼はいずれかの生で必ずや仏陀の道を歩くことになり、そして最終地点に到達するはずである。

◉有身謬見を切る

では、この我が身に対する間違った見解とは何であろうか。これは、この我が身、イコール感覚の喜びを満足させるための受容器であると考える考え方である。例えば、自分自身が美しいと、わたしは美しいと考える。確かに、今は美しいかもしれない。しかし、人間の形、あるいは顔といったものは必ず変化する。

例えば、わたしも、瞑想修行に没頭する前、まだ煩悩が多く代謝が盛んであったころは、一日一食の食事を取ると、ま、大変スタイルのいい状態を保つことが

できたと。しかし、今では一日一回、一八〇〇カロリーから、ま、二千ちょっとのカロリーを取るだけで、経行を十何キロ歩かないと、その体を維持することができないと。即、太ってしまうと。これは、それだけのカロリーを必要としない体ができあがっているからである。そして、一般的にいうところの醜い体型と変わると。

これは明らかに、わたしたちの形状というものが、条件によって左右されることの現われであるといわざるを得ない。

そして、この肉体を無常のものと見、その本質を見極めると。本質とは何かというと、例えばわたしたちの頭というものを採った場合、まず頭蓋骨があり、頭蓋骨の中に、例えば脳が入っており、脳の機能は、その右葉、左葉、あるいは前頭葉等の、その場所によって働きが違っていると。その働きを一つずつ認識し、そして、頭蓋骨のその防御の要素を一つずつ認識し、そして真皮、あるいは表皮の働き、あるいはこの頭の周り、内側に網羅されている血管の機能等を正確に認識すること。これが、この身体に対する観察智である。

つまり、目に見えているこの肉体の構成要素というものを正確に理解するだけではなく、目には見えていないが、例えば解剖することにより、実際に確実にそこに存在するもの、これをしっかりと認識すると。そして、それを認識することにより対象の理解というものが正確になり、その対象から来る苦しみというものを避けることができるようになると。

例えば、例を挙げるならば、人の心は無常であると。無常というのは、必ず変化すると。この変化というものを理解していれば、恋愛においての失恋、あるいは結婚においての離婚、その他について決して動揺することはない。なぜならば、人の心というものは必ず変化するものであるから、今対象はわたしを愛してくれているけども、いずれ変わるかもしれないし、変わらないかもしれないと。

よって、そういうものに頓着せず、今瞬間瞬間を全力で生きればいいんだという考え方が生じてくる。しかし、そうではなく、もし今自分を対象が愛してくれているということに対してとらわれ、それをよしとし、その変化を嫌がるとするならば、必ずや未来において苦しみが来るであろうと。

このような形で、例えば心に対して、あるいは身に対して観察すると。そして、この身体というものは、ちょうど車が十年、二十年乗れば壊れるのと同じように、必ず壊れゆくものであると。そして、その壊れることをわたしたちは死と呼んでいると。そして、その死を、この身体を有する限り避けることができないんだともし考えることができるならば、その人は一つの、下位に結びつける、つまり下の世界へ輪廻転生するきずなを切ることとなる。

◉戒に結びつけるきずなを捨断する重要性

では、なぜ下の世界へ至るきずなを切ることとなるのであろうか。これは、わたしたちが死、そして次の新しい生の期間、いかにはっきりと現象を見極める力があるかどうかですべてが決まってくるからである。ちょうどそれは、自分の数多くの運命の糸が垂れ下がった場所に行き、そしてそのどの糸を手繰って、あるいはどのひもを手繰ってよじ登り、目的地へ到達しようとするのかという比喩と似ている。

つまり、わたしたちが死から次の生の間の期間、わたしたちは多くのサインをそこで受ける。そして、わたしたちがもし誤った見解、誤った対象に対する認識を有しているならば、必ず誤った世界へと輪廻転生するのである。

よって、これらの対象をしっかりと認識し、理解することというのは、真理の実践における最重要課題ということになる。

◉疑念を捨断し、動物の発生を捨断する

次に、わたしたちが取り払わなければならないもの、それは疑念である。真理の実践を行なう場合、二つのタイプの修行者が存在するといわれている。その第一のタイプは、プラスアルファ型であると。第二のタイプは、マイナスアルファ型であると。

では、このプラスアルファ型とマイナスアルファ型の違いは何であろうかと。

プラスアルファ型は、今この現実の生活が存在していると。そして、修行することによりどのような利益があるのかを考え修行すると。この場合、このタイプ

は、この現実というものを認め、そして現実について満足しながら、それにどのような形で修行を加えていくかを考えるタイプである。

第二のタイプは、今ここに自分自身が生存していること、これは大変不安定なものである、そして、それは真理を学び実践するという修行を行なわない限り、そこから解放されることはないんだと考えると。そして、修行すると。

前者は、定食を食べ、定食に飽き足らず豪華な食事を取ろうとする人の心と似ている。後者は、食事を取る、その食事が必需的な取り方である、つまり人生において欠くことのできないものとしての食事であるという認識の仕方と似ていると。

もちろん、前者は、今の状況に満足し、それよりプラスアルファとしてこの修行を選ぶわけだから、いろいろな圧力に対して、あるいはいろいろな妨害に対してそれを乗り越えてまで修行しようとすることがなくなり、心が揺れ、結果的には到達する地点が低いということになると。

後者は、修行そのものがその人の人生のすべてということになるから、そして

もし修行しなければ、その人は自分の目的としているところへ至ることができないということを認識しているから、必死で修行すると。よって、到達地点が高いと。

つまり、前者はデコレーション的な修行者タイプであり、後者はまさに、不必要なものを有さない修行者タイプということになる。そして、このどちらのタイプにも、疑念を捨断することが必要であると。

では、なぜ疑念を捨断することが必要なのかと。それは、同じ修行を行なっていたとしても疑いを有している場合、当然力が入らないということになる。よって、疑念を捨断すると。

そして、この真理に対する疑念を捨断し、実践するならば、第二段階の動物の発生を捨断することができるといわれている。なぜならば、もともとわたしたちの智性、あるいは智慧といわれるものが発達していれば、この真理の法則というものは一目瞭然のはずである。

ところが、智慧がないがために、あるいは智性が低いがために、その真理とい

うものを見極めることができないと。そして、その智慧の弱い状態、これが動物の発生であると。

◉戒誓のとらわれを捨断し、低級霊域を捨断する

これら有身謬見、疑念の捨断、プラスもう一つ、それは、わたしたちを低級の霊界へと、低級の霊域へと引きずり込む正しくない誓い、あるいは正しくない戒、これを実践することを捨断すると。

この正しくない戒、あるいは正しくない誓いとはどういうものかというと、例えば、供犠と称して生き物の生命を殺し、そしてそれを神に捧げると。つまり、自分の幸福のために他の生命の苦しみを犠牲にすると。これは、明らかに自分の幸福に対する貪りというものを背景にしているから、貪りの世界である低級霊域へと転生するのである。

あるいは、例えばある願望があると。そして、その願望のために宗教的な誓いを行なうと。その人は、願望を達成するという一つの貪り、この貪りを背景とし

て修行するわけだから、当然同じようにプレータ、つまり低級霊域へと転生することになるのである。

まず、第一段階において、これらの有身謬見、疑念、そして戒誓のとらわれという三つを捨断することにより、わたしたちは、地獄、動物、低級霊域という三つの世界を捨断することができる。ここで低級霊域といっているのは、今までオウム真理教で餓鬼といっていた世界である。

◉愛欲の興奮、害心

次に、わたしたちが輪廻転生する際、この人間に生まれ変わる際、必ずわたしたちは、偉大なる到達真智運命魂、偉大なるボーディサットヴァでない限り、愛欲の憤激というものを背景として人間の子宮へと宿ることになる。

例えば、父母のセックスのヴィジョンが現われると。そして、女性は父親に対してものすごい愛欲を覚え、母親に対して嫉妬すると。例えば、男性は母親に対してものすごい愛欲を覚え、そして父親に対して嫉妬すると。そして子宮へ、気

づいたときには飛び込んでいると。これは、実際にクンダリニー・ヨーガ、そしてマハー・ムドラーの修行を行なっていると、必ずその父母との体験は経験するものである。

よって、この性的な興奮、性的な激憤といわれる状態を完全に止めてしまうこと、これは人間世界へ転生しないための条件ということになる。

では、第五番目のきずなの捨断、これは何を行なえばいいのだろうかと。これは、害心である。人間が、この人間より一つ上の世界、意識堕落天とも、あるいは阿修羅ともいわれる世界へ輪廻転生するときは、どのようなヴィジョンが見えてくるか。

これは、右側の前上方から赤い光が降りてくる。そして、その赤い光は、多くのヴィジョンを含んでいる。しかし、そのどのヴィジョンもすべてが闘争である。あるときはスポーツであったり。あるいは格闘技であったり、そして、そこで自分も一つ自分の力を試してみたい、あるいは対象を叩きのめしたいという意識が生じると。そして、この意識が生じた段階でその世界へ転生する。つまり害心、

あるいは慢、このような意識によって、意識堕落天へ転生するのである。

ということは逆に、そのような害心、あるいは慢を止めることができるならば、この意識堕落天へ転生することはなくなる。

これが、わたしたちを下位の世界へ結びつける五つのきずなである。

皆さんはもうわかったと思われるが、これらの内容を見て、真理というものは明らかに分析的科学であるということができるであろう。

◉上位に結びつけるきずなを捨断し、最終の解脱へ

では、より高い世界へ結びつける条件とは何であろうかと。その前提条件となるものは、この五つの要素というものを完全に止め、そして、それに今から述べる五つの要素を加算する、そうすることによって高い世界へ転生することができる。もちろん、この低い世界や高い世界の要素を完全に超越したいと考えるならば、この上位へ結びつける五つのきずな、これも止めてしまえばよいのである。

その第一番目は何かと。これは、形状に対するとらわれであると。この形状に

対するとらわれ、これを別の言い方をするならば、美に対するとらわれ、これを捨断することであると。

というのは、これら五つの下位に結びつけるきずなを捨断すると、わたしたちは上位の世界からの光が射してくる。その光、あるいは形は絶妙である。そして、大変美しいと。よって、ここにとらわれてしまうと、その世界へ転生すると。もし、その形状に対するとらわれを捨断するならば、わたしたちはその形状の世界へと輪廻転生をしなくなる。

では、上位に結びつける二番目は何であろうかと。これは、非形状、つまり空間に対するとらわれであると。もちろん、この空間に対するとらわれだけを残して死んだ場合、わたしたちは二万カルパ、つまりこの宇宙が創造され破壊される二万回の間、その空間で安らぎ、歓喜を味わうことができると。しかし、これらも有限であるから、当然捨断した方がよろしいと。

では、第三番目の上位に結びつけるきずなとは何であろうかと。これは、満足である。この慢は、確かに、いっさい外側に対して悪い影響を与えない。しかし、

その魂はそこで満足しているがために怠惰となり、そしてただ単に少しずつ少しずつ徳を消耗し、そしてこの魂もいずれまた苦しみの世界へ引っ張り戻されるのであると。よって、この慢も捨断しなければならない。

では、上位に結びつけるきずなの四番目は何であろうかと。これは、善に対するとらわれであると。この善に対するとらわれというのは、実際経典には出てこない。経典には興奮ということになっている。

つまり、このようにすればすべての魂は幸福になるんだ、このようにしなければすべての魂は幸福にならないんだと、そこで善悪をはっきり規定し、そして悪を叩き、善を称賛すると。ここで魂の背景となっているもの、それは興奮というエネルギーなのである。よって、四番目は、この興奮というエネルギーを捨断しなければならない。

そして第五番目は、もしわたしたちが世界のすべてを見、聞き、そしてにおい、味わい、感じることができるならば、わたしたちはすべての構成要素に対して無常を観察することになるだろう。

そして、その無常を実際に理解することにより、いかなる世界においても、その世界へ存在することそのものが苦しみであることを理解できるようになるであろう。このすべての現象を理解できないのは、神秘力、つまりすべてをありのままに知るための光、これを有しないからであると。

では、なぜ有しないのかと。それは、先程も述べた、経験に対するとらわれがわたしたちの心の働きの範囲を制限しているからであると。

よって、心の働きを完全に無制限に拡大したとき、わたしたちは非神秘力から神秘力に至ると。そして、最高の神の叡智、絶対の神の叡智をそこで手に入れ、それによりすべての現象をありのままに見つめることができるようになると。

よって、経験のとらわれ、非神秘力を捨断することにより、わたしたちは上位に結びつける五つのきずなのすべてを経験し、そして捨断し、最終の解脱へと至るのである。

◉真理の流れの十三段階の道

この、下位に結びつける五つのきずな、上位に結びつける五つのきずな、この十個を一つ一つ確実にクリアしていく。これが、十三段階のステージを十に分割する道といわれている。

では、十三段階の道とは何かと。それを簡単に触れるならば、先程も述べた、まず第一に、信によって生きるということである。

第二番目は、この愛欲の世界に最高七回流転するということである。

第三段階は、裕福な家に数度転生し、そして解脱するということである。

第四番目は、この人間の世界に一度だけ転生し、解脱するということである。

第五番目は、愛欲の世界、特に戯れ堕落天に一度だけ転生して解脱するということである。

第六番目は、この人間の世界からどんどん高い世界へ上がっていき、最後は色究竟天へ至るという魂である。

第七番目は、形状界に入り、そこで形状界における楽しみを受けながら、煩悩

破壊のデータを入れ、そして煩悩破壊しニルヴァーナに入るという段階である。

第八番目は、もう既に喜びを受けるという要素と煩悩破壊という両方の要素を有しており、その喜びのカルマが完全に止滅した段階で自動的に煩悩破壊する魂である。

第九番目は、いったん形状界に入り、そして非形状界へとポアし、そこから煩悩破壊する魂である。

第十番目は、修行が終わり、死に、そして形状界のバルドーに入り、非形状界のバルドーに入り、そこから煩悩破壊する魂である。

第十一番目は、いったん死に、そして非形状界に入り、非形状界から煩悩破壊する魂である。

第十二番目は、死の直後、非形状界に入らず煩悩破壊する魂である。

そして、最も優れている者は、この現世において煩悩破壊し、十の能力者となり、そして死のときに大完全煩悩破壊する魂である。

これら十三のタイプの魂は、もちろん真理の流れに入っている十三の魂という

ことになる。そして、これら十三の魂の流れに入った者は、大変激しい地獄の苦しみが存在することはないし、あるいは動物の発生、これも止めることができるし、そして低級霊域へ転生することはないと。また、悲しみや離別といったようなものからも解放されると。特にこの離別、離別というのは意識が断続しているから離別が生じるのであって、もし意識が連続していれば生じることはない。

そして、ここにいる皆さんは、その十三の段階の魂の流れに入るべく大いなる神々であるシヴァ大神、あるいはすべての真理勝者方の祝福を受け、そしてわたしと前生からの縁によってここでこのように一緒に存在している。

今日のこの話が、皆さんの真理の目を開き、そして近い未来において、本当の自由、本当の幸福、本当の歓喜を得ますように。

一九九一年十一月二十五日　世田谷区民会館（大いなる祝福）にて

質疑応答

◉五蘊から「離れる」ことと五蘊を「越す」ことの違い

（質問者A）五蘊から離れるということと、五蘊を越すということについてお伺いしたいんですけど。

（尊師）それは、ドブ川のたとえを考えたらいい。どういうことかというと、五蘊から離れるというのは、ドブ川に入らないということです。これは、ドブ川と自分とが別個であると。けがれませんね、決して。ところが、五蘊を越すというのは、ドブ川の中に入ってもけがれないということです。

例えば、わたしたちは、目、耳、鼻、口、そして触覚というものを持っていますよね。で、この一切の感覚を使わないようにしようと、そして使わないで、内側の内的心理器官を使おうとするのが、五蘊から離れるということです。越すというのは、普段使っていても、それが今度は内側の心、あるいは魂というものに

影響しないような状態をつくっていくこと。これは、五蘊を越すということです。

（質問者A） で、オウムの修行システムっていうか、初めに四念処（しねんじょ）の瞑想とかいうのがまず出てくるということで、まずは離れることから始めるんですか。

（尊師） そうではないです。ヒナヤーナ・プロセス、つまり小乗の仏教とか、小乗のヨーガといわれているプロセスを、まずわたしは説いたわけです。そして、去年は大乗のプロセスを説いたわけです。マハーヤーナ・プロセスといってますね、これは。そして、今年はタントラヤーナ・プロセスを説きます。つまり、この三つの間には共通の部分もあるし、矛盾している部分もあります。ただ、ステージは下から上へと上がっていきます。

（質問者A） あと、五蘊から離れるという段階は、アストラル・ヴィジョンを遠ざけてしまうというか、消すっていうことですよね。

（尊師） ええ、消すまでいかなくてもいいですけどね、遠ざけると。

（質問者A） そういうヴィジョンに対する強さというのは、やっぱり離れる、じゃなくて越すという形でつくっておかないといけないんですか。

（尊師）いや、それは、強さはそれは出ませんね。越すというプロセスでいったならば強くなります。

一九八八年一月十日　名古屋支部にて

◉五蘊とプラーナ、心の関係

（質問者B）五蘊とプラーナ、それから心とプラーナの関係を詳しくお願いします。

（尊師）難しい質問だね。この前（第二話「五蘊とプラーナ」参照）も話したと思うけども、まず五蘊というのは、色、受、想、行、識、これはOKだな。そうしたら、例えばここに肉体があったとして、これが死んだとしても、一応色であることは間違いなかろう。どうだ。

（質問者B）あ、ちょっとわからないです。

（尊師）例えば、ここで人が死んでいるとするよ。しかし、そこには魂は内在し

ていないよね。よって、この肉体は単なる物質でしょ。でも、肉体であることは間違いないでしょ。それはわかるね。

ところが、その真我とその肉体をつないでいるもの、それがプラーナなんだよ。つまり、プラーナというのは何かというと、要するに、そうだな、電線みたいなもんだな。あるいは、電波みたいなもんだ。わかるか。そして、この肉体をロボットのように操っていると、そう考えよう。だから、もし発信人が電波を止めたならば、その肉体は動かないよね。わかるかな。それと同じだ。それが、プラーナと色との関係だ。

同じように、感覚もそうだ。死んだ場合、耳は残っているけども、もうプラーナが介在していないから、その聴覚は働かないよね。

表層、ね、それから意志、意識と呼ばれているものも、すべて同じです。で、わたしたちがね、一般的に心といっているものは何かというと、いいかな、表層意識を心といっています。あるいは、受、感覚から生じる意識、これも心といっている。わかるね。

ただ、その心というのはもっと深い部分があって、それには先程の潜在的な意識も含まれるんだよ。わかるかな。そして、その心をコントロールしているもの、といったらいいのかな、心の内奥にあるもの、それが真我です。そして、その真我と心をつないでいるものが、先程言ったとおり、プラーナだということができると。いいかな。

（質問者B） はい。心がプラーナを制御することはできますか。

（尊師） 心がプラーナを制御することはできないけども、真我がプラーナを制御することはできます。だから、解脱をするとプラーナを制御できるようになるんだね。しかし、それはあくまでも瞑想というね、技術を使わなければできないということだ。いいか。

つまりどういうことかというと、心が完全に静止した状態のときに真我が現われ出ると考えましょう、ね。で、その現われ出た真我、つまり、それがまあ我だけどね、実際のところ。その我に到達した者は、プラーナをコントロールできると。いいかな。かなり難しいね。それは、体験的に理解するようにしなさい。

（質問者B）はい。ありがとうございました。

一九八九年五月五日　富士山総本部にて

◉「識」と「行」の意味

（質問者C）五蘊の色、受、想、行、識の最後の識の意味は、潜在意識と超潜在意識の両方のことを意味するんですか、それとも潜在意識だけのことですか。

（尊師）まず、Tに聞きたいのは、潜在意識、超潜在意識という意味はわかるか、体験的に。

（質問者C）潜在意識は、あの、アストラル……。

（尊師）体験的にわかるか。

（質問者C）体験ですか。超潜在意識の体験はわかりません。

（尊師）わからないよな。修行をしていけば、その識という意味はわかります。

（質問者C）ということは、三昧に入るということでしょうか。

（尊師）そうだ。

（質問者C）はい、わかりました。あと、もう一つお願いします。行の意志という意味は、欲望とか欲求の意味と同じということでいいんでしょうか。

（尊師）そうです、それでいいです。

◉プラーナの種類

（質問者D）真我と五蘊をつないでいるプラーナと、サットヴァ・プラーナ、ラジャス・プラーナ、タマス・プラーナという三つのグナというのは、全く別と考えていいんですか。

（尊師）同じと考えていいです、それは。ただ、例えば大学という名前があると。いいかな。そして、例えば、一つ一つの大学があると。そして、その大学の中に一人一人生徒がいると。まあ、その前に学部があるでもいいけども。

何をいいたいかというと、まず根本プラーナがあって、それは三つに分かれる

と、ね。だから、その三つを一つということもできると。そして、その三つはまた細分化されると。だから、例えば一概にプラーナについて説明することはできないと。例えばね、何が何種類あって、何が何種類あって、何が何種類というのは説明しても構わないと思うけど、ただ、今ここで弟子たちにそれをやったとしても何の利益も与えないから、今わたしはそれを話さないと。いいかな。

一九八九年六月一日　富士山総本部にて（質問者C&D）

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天
楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界

梵天→神聖天

梵衆天→神聖衆愛欲神天

梵輔天→神聖臣天

大梵天→大神聖天

浄天→美天

遍浄天→総美愛欲本質神天

広果天→偉大果報愛欲本質神天

浄居天→清潔居住天

無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天

善見天→善現象愛欲神天

色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界

空無辺処→空間無辺境

識無辺処→識別無辺境

無所有処→無所有境

非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山

東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸

南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸

西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）

調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）
菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）
阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断→二正断二正勤
断断→現在悪業断
律儀断→未来悪業断
修断→現在善業勤
随護断→未来善業勤

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習覚醒段階
択法覚支→検討覚醒段階
精進覚支→精進覚醒段階
喜覚支→喜覚醒段階
軽安覚支→静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支→無頓着覚醒段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い構成要素の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心→四無量心（変更なし）
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の興奮による障害
瞋恚蓋→害心による障害
婚眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）
触→接触

五下分結→五つの下位に結び付けるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の興奮
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結び付けるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八離解脱
八勝処→八勝境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素-形状-容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→窃盗
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→虚言
綺語→軽薄語
悪口→悪口（変更なし）
両舌→中傷
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、
最高の修行法を伝授する。
本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀——
ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、
誕生した三五〇名の解脱者が証明する。
さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、
農作物輸入自由化など、
今日の世界と日本の動向を正確に予言している、
驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。
◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

武田 健さん（東京都／学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

麻原彰晃の世界シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1
幸福に至る四つの実践

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

B6判　定価2500円

PART-2
尊師、麻原彰晃が斬る！

願望成就の秘訣、UFO&宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

B6判　定価980円

PART-3
真実！六道輪廻

永遠の真実「六道輪廻」。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

B6判　定価980円

PART-4
宗教にだまされるな！

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

B6判　定価980円

PART-5

絶対の真理

B6判　定価980円

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる——幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

PART-6

願望成就の秘法

B6判　定価980円

安全で確実な願望成就の秘法とは？ 仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう？……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

PART-7

仏教真理　八正道

B6判　定価800円

最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。巻末に「道に関係づけられた経典（道相応）」の現代語訳も掲載。

PART-8

仏教真理　六波羅蜜

B6判　定価800円

大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる！ 巻末には、高弟たちの体験談の特別付録付き。

PART-9

尊師、聖地インドを行く

B6判　定価750円

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

PART-11

尊師、講演特集

（仮タイトル）

B6判　予価700円

近日発刊予定

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

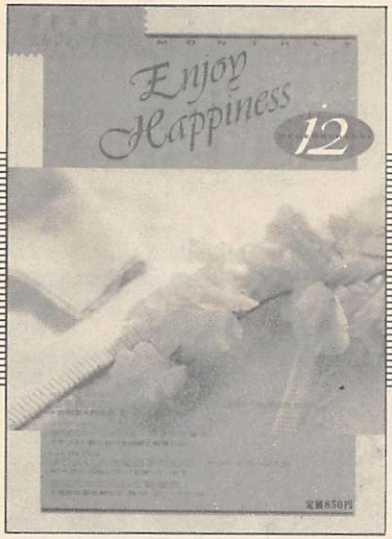
オウム出版　本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL.03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL.03(5370)1598

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』



――主な内容――

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教 AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか?

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界 PART10

資料請求券

◆各道場のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART10
『仏教真理　五蘊無我』
1992年 1月19日　初版発行
定　価　650円（本体630円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325
©Shoko Asahara 1992
ISBN4—87142—009—4　C0014　P650E
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-87142-009-4 C0014 P650E 定価650円（本体630円）